

---

# IS インフィニット・ストラatos ~ツインドライブの使い手~

Thalys-hiiragi

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

I S インフィニット・ストラatos→ツインドライブの使い手

### 【Zコード】

Z6009V

### 【作者名】

Thalys-hiragi

### 【あらすじ】

アホな神様のせいで転生する羽目になつた男、赤城 翔は新たに赤城"ポルシェ・翔"と名前となり I S インフィニットストラatosの世界に飛ばされる事となつた。

主人公は準最強、原作の順番?無視します、でも一応まともな作品に仕上げるつもりです。

若干キャラ崩壊しています。苦手な方は「遠慮ください」。

原則的に毎週日曜日更新。1週間が変則的になると変動あり

## 設定情報（前書き）

プロローグは次回からです  
ここは設定のページ  
物語では最初からある設定で説明の入らない物の説明ページです

## 設定情報

主人公プロフィール

氏名：赤城＝ポルシェ・翔（Akagi＝Porsche・Kakeru）

血縁：ドイツ系イギリス人と日本人のハーフ  
イメージカラー：エカルラート（スカーレット）

容姿：欧洲人的な肌を持ち、肩まで伸ばした銀髪が特徴。瞳の色は翠色。

年齢16歳

身長168cm

体重55kg

誕生日：04/02

出身日本？

住所不明

所属篠ノ之ラボ テストパイロット

IS適正：S

使用するIS

・ブラックバード（形式：FX/SR-71/BT）（第4・5世代IS）

・ミラージュランサーF1（形式：FX/G2/CR-200）（第3世代IS）

通称「ツインドライブの使い手」

ツインドライブは2つのISを「組み合わせて使用する」という意味

ISの独自設定についての解説

・世代について

第4世代

白式や紅椿など数機が稼働するにとどまるが実戦での戦闘力はかなりの物

#### 第4・5世代

現状で世界にブラックバードのみで一機しか存在しない。第4世代以上の性能を持つため主人公である翔が勝手に位置づけたもので第4世代との決定的な違いは燃費性能、バースロット拡張領域の大容量化など従来のISからの変更点は500力所以上にもおよび第5世代と言つても過言でない。

#### 表記

- ・初登場時のみ「ブラックバード（FX/SR-71/BT）」と記す
- ・以降は「ブラックバード」と記す

何故に形式があるのか

- ・翔がかっこいいと思ったから神様が勝手に付けていた形式をそのまま使用してるだけ

ACT・〇〇「始まつせプロジェクト」（前書き）

とつあえず「転生までの話です。  
本筋は本編は次回からで

## ACT・00「始まつばプロジェクト」について

「」を見ていいの皆さんは死について考えたことがあるだろ？

まあ作者も含めて体験したことほ無いと思います。

僕は死にましたが・・・

「何で死んだかって？そりゃおまえの不注意だぜ」

「だれ？」この魔法使いみたいな子は

「あたし？」あたしは神様だぜ！」

「神さま？」

「『ビ』がとか言つなあ！」

「めんな、ちよつちよつとまつて！？」痛い殴らないで・・・

（中略）

「さて、早速だけど貴方・・・名前覚えてる？」

僕の名前？赤城＝ポルシェ・翔だけど？

「覚えてんだ・・・童顔のくせに」

覚えておいてほしくなかったような口ぶりですね、自称神さま。あ

と童顔は余計だ・・・。

「だつて、あたしが名前を考えられるからだぜー。」

ああ・・・そーですか・・・

「さて、これから君は次の世界に飛んでもらつんだけじ・・・  
いきなり!?

「なんか文句でも?」

別に、無いけどさ、俺が死んだ原因とかそのほかは?

「ん、今回飛んでもらつ世界は・・・」

俺の話は無視?

「はいはい、翔の死因はな・・・飛び出してきた猫を轢きそうになつて避けたら追突されて死んだんだぜー!まああたしのミスで天国に行くはずがいけなくしちゃつたんだぜー!」

その決定はもう覆らないみたいですね

「まあ過去のこと気付いた・・・でも結局は気にしたら負けー?  
どな

心配になつて気付いた・・・でも結局は気にしたら負けー?」

「もう言つてだぜー!といえず、異変が起きてるとひり行つて、

そこで問題を解決したら適当なところまで生き残れるよう手措置は執つたからノープログラムだぜ！」

やつぱりあなたの頭が心配だ……

「さて、今回行つてもう世界はIISの世界だぜ！。あ、ここでクルマネタとか出してもダメだぜ！もうそのネタ知つてるから」

IISってどんな世界だ？be動詞だから3人称？

「どんな理解の仕方だよ……インフィニット・ストライクだぜ！」

ランチアの新型ストライクス？

「へいへい、天然で言われる？それともわざと？」

しらね

「仕方ないな、とりあえず簡単に説明するぜ。」

女性にしか反応しない世界最強の兵器「インフィニット・ストライク（IIS）」の出現後、男女の社会的パワーバランスが一変し女尊男卑が当たり前になってしまった時代。

織斑一夏は、自身が受ける高校の試験会場と間違つてIIS操縦者育成学校「IIS学園」の試験会場のIISを起動させてしまいIIS学園に入学させられる。

「世界で唯一IISを使える男」である彼はIIS学園の生徒たちにとっては興味の的。そもそも出会いや再会を通じ、一夏の前途多難な日常が始まる。

「とまあことな感じだぜ」

読んだのは俺だけどね、でもコレだと入り込む余地無いよね？

「ふつふつふ・・・そこはあたし神さまだから」

「わづびうじでモなれ・・・

「と畜のことで、翔の相棒を作ろ」

「あー・・・そのヒツテヤツ?」

「セウセウ」

女にしか反応しないんでしょ？俺男だけぢ？

「だから？あたしは神さまなんだぜ！」

「はいはい、やーですね

「とつあえず、翔の愛車から名前をもらつて Blackbirdブラックバードだ  
ぜー！」

俺は医者じやないけどね・・・といふか俺のバイク・・・

「ちなみに向こうじや高校生から排気量制限なしでバイク乗れるか  
り問題なく走つて良いぜー！」

「マジで！？」

「ブラックバード（開発コード・FX/SR-71/BT）は第4・5世代のISにしといたぜ」

基本資料だと第4世代までしかないけど？

「新しい方が良いだろ？」

まあね・・・

「それからブラックバードには管理人格がいてな」

「初めましてマスター、私はBlackbird Auto Control System、略してB·A·C·S（バックス）と呼んでください」

ちょいちょい神さま質問！

「なに？」

ISはみんな管理人格を持つてているわけ？

「私をそこいらの「コンピュータのAI」と一緒に考えてほしくはないです、私はISの頭脳そのもので私はISの意志です」

「普通はいないぜ！翔だけの特別装備！いまならキャッシュバック！」

なんじやそりや・・・

「とりあえず、もう一つヒューリがお前に渡るよ！」おこでやるば  
！もしかしたら有効活用できるかもしれないからなー。じやあいつて  
らっしゃーい」

僕の視界は暗転した

「で、ここは何処だ？」

暗転した視界が元に戻ったのはすぐのことだった。

たぶんどこかの上空と重つ」とは確か  
そう落ちていた・・・それもえらい高さから・・・多く見積もって  
50メートル

「ブラックバード！」

ブラックバードの待機状態は腕時計だった

「展開します」

俺の左右に黒い装甲が展開されていく

「展開完了。システムチェック、全システムオールグリーン、異常  
ありません」

思い切り俺は制動をかけた

「とまつ・・・た？」

地上レスレで停止

「お見事です、マスター」

初期動作では高速域からの制動、また補助的な意味で自動的な制動  
がかかっていた。

と思う

しかしここは何処だ？

どこかの高校（もしくは大学）の入試会場のようにも見て取れるが。  
・・。

「おい！そこのＩＳ操縦者！」

声をかけられた・・・うわー、なんか似たようなカッコした人が  
いっぱいいる・・・

「ＧＰＳ補足、現在位置を表示します」

そう、場所は最悪だつたな。何せその場所とは  
「ＩＳ学園だと？」

## ACT・00 「始まつぱプロジェクト」（後書き）

とつあえずプロローグを上げましたが実はこのプロローグ、結末が2つあるウチの後から考えた方なんですね、もう修正効かないけどww

とりあえずこんな感じの主人公視点で書いていきますよ  
まあ時々誰かの視点で書いてみるのも良いですね。  
では第1話でまたお会いしましょう

ご意見ご感想をお待ちしています。

## ACT・01「入学試験（通過儀礼）」

まあその後IIS学園での精密検査（といづより実験動物扱いだけどな）で1ヶ月ほどこの学園で過ごしたわけだけど……。

結局、俺はそのHHS学園にほぼ強制入学させられてしまった。

理由？そりゃあ男でIISを運用できるから。俺の横にいる織斑先生の弟である織斑一夏と同じくね。

「赤城、お前には一応この学園の入学試験を受けてもらひつ。なに通過儀礼とでも思ってくれて良い」

なんとまあ、俺はさうと負けて入学できない方向でお願いしたいけどね織斑先生。

「拒否権はないみたいですね。ブラックバード、展開」「了解しました」

まあ外見は飛行外骨格（飛行可能なパワードスージ）のよつなもんだな

相手はこの学園の教師か・・・

「そうだ赤城、一つ言つておくが・・・手を抜いていたらすぐに分かるからな」  
本気でも出せとおっしゃる？そーですか、だが断る・・・なんて言えないよな。

「はじめ！」

織斑先生の合図で俺は一気に間合いを詰める

「Engage」

頭の中で戦闘スイッチが入った

速攻で力タを付ける！

「ワンオフ・アビリティー。使用可能です」

「Drive and Zoom（一撃離脱戦法）で終わらせな

瞬時加速で一気に上昇する  
ワンオフ・アビリティー

そして单一仕様能力解放

「きつ消えた！？」

俺の単一仕様能力である「漆黒ノ霧」は相手のセンサーの有効範囲内でもセンサーを反応させず、視界からも見えなくなるという能力

「こんな戦法は嫌いだけど・・・そんな事言つてられないか

「RDY GUN」

シールドバリアーを破つて速攻を決める・・・。

「FIRE」

毎分1万発上のRM61A1レールバルカン、勝負は1秒以下で終わる。

見えない攻撃は怖いよね。

「戦闘所要時間：3分12秒、損害なし、MISSION C MP

」

「作戦終了、展開解除 RTB」

とまあ、コレが俺の初戦だった。

IIS適正は「S」

「まったく・・・おまえほどの適正があつてあまり入学に乗り気でない者は初めて見たぞ」

織斑先生、普通はそだらううナビ俺の境遇考えてほしい物です

「男でIISを使用できるのは2人だけ・・・でしたっけ？目立つのは「めんですから目立ちたくないというのが俺の本意であつて入学とか・・・マジで神様恨むぜ・・・。」

「その話はおいておくとして。今日の用件だが、おまえに荷物が届いてる」

いやこのコンテナは荷物つてレベルじゃないぜ

差出人は篠ノ之 束

「これは・・・」

「お前専用のデータ取りIISとしてこ、たば・・・篠ノ之博士がおまえのIIS補助用にと専用制作したそうだ。もちろん通常の起動手順を踏めば普通のIISとしても機能する」

篠ノ之束博士、IISの発明者である。一人でIISの基礎理論を考案、実証し、全てのIISのコアを造った自他共に認める「天才」科学者。製造したIISは467機にとどまる。

「マージュ・ランサーF1（FX/G2/CR-200）・・・」

ブラックバーードには第一形態になるための機能が欠如しているらしい。それを補う機能を持ったのがミラージュだといつ。

「専用機持ちの上に2機も保有とはな  
織斑先生は呆れているけど、俺だつて好きで持つてんんじゃないかな？」

「ミラージュは基本的に私と同じシステム構造をしていますが、私と決定的に違うのはこいつして貴方たちとコハクニコケーションをとれない事です」

「僕の分析だと君はHSの深層意識を具現化した存在だとおもづけどね」

「私としてはコレが普通なのですが？」

「そうでしょ? ね、でも

「君は普通のヒーリングじゃないじゃない」

「とにかく、おまえには入学までの1週間でコレを必読してもらわなくてはいけない」

出されたのは分厚い本で恐らく広辞苑くらいあるが…。

「コレを、全部ですか?」

「俺はHSの基本知識は皆無だからなあ…。

「当たり前だ、いくら実技で高得点を出しても頭がついてこなれば意味がない」

バラバラとページをめくるけども、辞書つて言つか電話帳つて言つか…あり得ない情報量だよ?」

「とりあえず暗記しておきます」

何故かめくつただけで内容が完全に頭に入っていた・・・  
あの神様が俺に高い記憶能力を付けたのか？・・・無いな・・・。

その後まあそのほかIS学園での俺自身への調査があるため世間への公表は控えられたが、入試会場でISを動かした男として俺以外にも一人、すごいことになっている男が居た

「織斑一夏か・・・とんだ貧乏クジを引いたみたいだな」

第2話へ続く

## ACT・01「入学試験（通過儀礼）」（後書き）

プロローグを書いた後に修正しまくった第1話です。

とりあえず1日目だけですごい話数になりそうwww

「意見」「感想をお待ちしています

## ACT・02 「IS学園入学」

### 入学初日

俺のクラスには重苦しいといふか異様な雰囲気が漂っていた  
それもそうだ。

だつて、俺ともう一人織斑一夏は世界で一番不似合いな場所に居る  
のだから。

ここは世界で唯一のIS操縦者育成用特殊国立高等学校。操縦者に  
限らず専門のメカニックなど、ISに関連する人材はほぼこの学園  
で育成されるらしい。

前にも言つたがISを操縦できるのは女性のみという事になつてい  
る中、1年1組には男子生徒が居るのである・・・それも2人  
でも・・・メカニック課程には男子生徒が居てもおかしくはないよ  
ね?

後で織斑先生に聞いてみるか。

ため息が出そう・・・いやもう出でるといふかか・・・。

「きつい・・・」

「だるい・・・」

上は織斑君、下が俺

しばらくして副担任の・・・あ、あの人の俺が撃墜した人だ  
「皆さん入学おめでとう、私は副担任の山田 真野です」  
入ってくるときに俺を見て一瞬硬直したような気がするがあまい  
か。

クラスの雰囲気?そりやあ明るく挨拶をしてくれた山田先生には悪

「けいじ重こまだよ俺は珍獣じゃねえ・・・」

「きょつ今日から皆さんはこのHS学園の生徒です、この学園は全寮制。学校でも放課後も一緒に。仲良く助け合って楽しい3年間にしましょうね」

さつきからずつとだけどさ、俺と織斑君に視線が集中・・・・。

「じゃあ自己紹介をお願いします、えっと出席番号順で・・・」

出席番号順！？

読者の皆さん、俺の名前を「存じだらうか」と言つた覚えてるよね？覚えてもらえてないと泣くよ俺・・・。

俺の名前、赤城＝ポルシェ・翔。

ア行の上に次は力行なので相原とかそういう名字が来ない限りは90%の確率で出席番1番となる。その状況が今である。

「では、赤城君・・・お願いします」

起立して

「赤城 翔です、よろしくお願いします。趣味は読書です、人見知りはないタイプなんで気軽に話しかけてくださいね」

当たり障り無いだろ？普通に済ませたつもりだけど無駄に注目はされてるな・・・仕方ないけどね。

織斑君は上の空だな

といふかこの状況で上の空は危ないぞ、織斑君、甘いよ、甘すぎる、世界一甘いといつてルゴーテザートよりも認識が甘い！

「織斑一夏君？」

山田先生が織斑君の番になつたことを教えてくれてるんだけど気がつて無いみたい。

「はっはい！」

飛び上がるよろこび驚くとは・・・

「大声だしちゃって」めんなさい、でも「ア」から始まつてもう「オ」なんだけど、自己紹介してくれるかなあ？だめかなあ？」

うわー・・・山田先生の顔ちけー

「いやつ・・・そんなに謝らなくても・・・」

居心地悪そと言づか言葉に困るといつか・・・あの状況なら俺も

だけど

「私が居ることをお忘れではないですね？」

「そりやあね・・・でも今はしゃべらないこと」

超小声でバックスに命じた

「えー・・・えっと、織斑一夏ですよりしくお願ひします。・・・

・

俺以上に注目されてるな、経験からしてそこでそれ以外何か言わないと後が大変なことになるぞ、

織斑君は俺を挟んで反対側の女子を見て助けを求めるような目をしているが・・・そっぽ向かれてる。

なにか自身の中で結論に達したのか深呼吸のあと・・・

「・・・以上です！」

言い切った！？

俺は机に突っ伏したしほかのクラスメイトはズッコケた。

「え？ あつあれ？ダメでした？」

戸惑う織斑君に近づいたのは俺の試験監督をしていた織斑先生・・・あれ？織斑？

バコン！

鋭い出席簿攻撃？・・・アレは痛そうだ

「げつ！？千冬ねえ！」

さらにもつゝ発追加

「学校では織斑先生だ」

あ一家族というかお姉さんなんだ

「諸君、私が担任の織斑值冬だ。君たちヒヨウを1年で使い物にするのが仕事だ」

担任の挨拶のあとは黄色い歓声・・・

「お姉さまーもつと叱つて！罵つて！..」

前途多難だし・・・あとは！」想像にお任せするとして・・・中略！

「諸君らにはこれからISの基礎知識を半年で覚えてもらつ、その後実習だが基本動作は半月で体にしみこませろ、いいか？いいなら返事をしろ、良くなくとも返事をしろー！」

もちろん一同（俺は適当にだけど）気合いの入った返事が帰つた。

IS、正式名称「インフィニット・ストラトス」。宇宙空間での活動を想定し、開発されたマルチフォーム・スーツ。ISは核となるコアと腕や脚などの部分的な装甲であるISアーマーから形成されている。その攻撃力、防御力、機動力は非常に高い究極の機動兵器。特に防御機能は突出して優れており、シールドエネルギーによるバリアー や「絶対防御」などによってあらゆる攻撃に対処でき、操縦者が生命の危機にさらされることはほとんどない。ISには武器を量子化させて保存できる特殊なデータ領域があり、操縦者の意志で自由に保存してある武器を呼び出せる。ハイパーセンサーの採用に

よつて、「コンピューターよりも早く思考と判断ができる、実行へと移せる。

そしてEVAは女性にしか動かせない。

休み時間・・・

「織斑君だよね？」

しかし周りの視線を見ると注目度は抜群だな

「あ・・・ああ、えっと・・・」

やパリ自己紹介は聞いてなかつたか

「赤城 翔です、よろしくね。織斑君」

「一夏で良いよ、えつと赤城さん？」

さん付けができれば君付けにしてほしい

「翔で良いよ。名字で呼ばれるのは好きじゃないから。にしても大変なところに来きたな・・・俺もだけど」

俺はともかく一夏は才能だろうけど

「まあ、少ない男だし、仲良くしようぜ」

そしてもう一人黒髪のポーテールの女子が

「ちょっと良いか？」

さつき自己紹介の時に一夏から目をそらした人だった

「え？」

俺は居ない方が良さそう・・・俺も流れ的にというか一夏に連れ出されたんだけど、屋上に呼び出された

俺としては気まずいよ？

「何のようだよ？」

やつぱり知り合いだったのか

「うん・・・」

言葉が詰まつてるのは俺を意識してか？

「邪魔者は消えようか？積もる話とかあるだろ？。その辺で油を売つてくるよ」

そう言つて俺は屋上の端っこに急いだ

「いや、私と一夏はそう言う関係では・・・」

そう言う・・・誰だつけ・・・えーっと篠ノ介さんだったな、篠ノ介さんを振り切つた。

二人から離れて声が聞こえない程度の距離まで来てから俺は待機状態のバックスに話しかけた

「バックス、異常は？」

「ありません、空間受動レーダー共に静かです」

特に変わった様子は無いようだけど・・・いや、建物の陰に多数の女子が居ることをのぞいてはね

「分かった、監視モードのまま続ける」

「了解しました、マスター」

マスターって・・・あんまり響き的に嫌いだ・・・マスターとスレイブみたいな主従関係的だからかな？

「バックス、俺を呼ぶときに何が一番適正だと思いますか？」

「マスターが適正だと思いますが、変更されたいのですか？」

「名前で呼んでくれ。堅苦しいのは嫌いだ」

「昔からそうだったからな・・・」

「了解です、翔」

「うちの方がしつくり来るね

「にしても、あの二人は何だ・・・まるで数年ぶりに元恋人にあつたような・・・」

「翔、それ以上は・・・」

バックスに止められた

## キンゴーンカーンゴーン・キンゴーンカーンゴーン

1時間目 教科：IS基礎理論

とりあえずまだ例の必読書に乗っている内容からしか出ないのか・・・いや待てよ教科書は暗記しておいた方が良いな。

「では」ここまで質問がある人？分からないとこはどこかありますか？」

一夏は・・・顔が青白いぞ？

「織斑君？何か質問はありますか？」

山田先生は優しい人だな・・・ぶつちやけ一夏にとつてはどうか分からぬけど俺にとつてはわかりやすく解説してくれて良い先生だとは思うよ。

まあ一夏の答えは恐らく先生の予想の斜め上を行く答えたけどね

「ほとんど全然分かりません・・・」

まあ調べによると男と女ではISに関して全くと言つて良いほどカリキュラムの作り方が違うのだそうだ。

確かに十数年間分の差は大きいよな。

「ほとんど全部ですか！？・・・今の段階で分からなって言つ人はどのくらいいますか？」

山田先生は睡然

まあ俺は基本的にあの本に書いてあつたことなり答へられるけど・・。

手は上がらない

教室の入り口の方で静観していた織斑先生に近寄つて

「織斑、入学前の参考書は読んだか?」

参考書=例の必読書ね

「えーっと、電話帳と間違えて捨てました

バコン!

織斑先生の強烈な一撃

アレは痛いぞ、絶対に痛いだつて角だもんあの「黒くて平たい以下

略」の角だから

「あとで再発行してやるから、1週間以内に覚える、いいな

さては俺に一夏のフォローをさせるためにあの神様は俺を送つたな・

・

第3話へ続く

## ACT・02「IS学園入学」（後書き）

第2話でした。

書きためた物を出しているのですが土壇場で修正するとは・・・  
1話分書いたら掲載という感じにしています。

ご意見ご感想をお待ちしています。

## ACT・03「長い一日が終わらない」

次の休み時間

俺は一夏のフォローとすべてのテキストを暗記するために俺と一夏の机に本の山を作っていた

「そう、だからシステムのこの部分を使用してP.I.CやM.A.Rを制御するわけ、モーショントレーサーは独自のシステムを持っている場合があるね」

俺？即席教師って所かな

「じゃあこれは・・・えーっと」

早速基礎知識で転びそう・・・

そこに現れたのは金髪のクラスメイト・・・まあ俺も髪の色は銀だけどさ、珍しいよね日本だとあまり見ないし

「ちょっとよろしくて？」

この状況を見る・・・と言いたいけど

「よろしくないので後に聞いていただけますか？」

誰だか知らないけど・・・お偉いさんところの人だったりやだなあ・

・

「この私が話しかけているといつのぞ・・・それ相応の態度という物があるのではないかしら？」

貴方が誰なのか知らないし

「じりんの通りこの山をどうにかしないと一夏が織斑先生からどんな仕打ちに合うか分かったものではないので・・・無礼を承知の上

でこのような態度を取っているのです、申し訳ありません」  
あー、思い出した、セシリ亞・オルコットさんだなイギリス代表候補生の人だ。

「まあ、その無礼は許して差し上げましょ！」  
とりあえず例文通りの謝罪をしておいて

「一夏、この人知ってる？」  
オルコットさんに聞こえないように一夏に効いてみると

「俺は知らない、翔は？」  
自己紹介をちゃんと聞いていなかつた証拠だな

「名前だけは知ってる」

俺はとりあえずこの人を追っ払わないと一夏の勉強に支障が出ると  
判断したんでさつたと話を済ませてもらいます。

「では、少々勉強の時間を変更します。ええっとオルコットさん…。  
・でしたよね？赤城＝ポルシェ・翔と申します、以後お見知りおき  
を。」

「あれ？翔ってミドルネーム持つてるの？」  
そうだ俺、自己紹介で説明はスルーしてたね。

「そうだ、説明してなかつたね俺は、多分ハーフだから。イギリス  
と日本の…でも今自分がどっちの国籍なのか分かつてないとい  
うか、記憶もない、身内もない、戸籍も見つかんない、無い無いづ  
くしなんだ。知つてるのは相棒が居ると自分の名前だけ」

そう言つて俺は腕時計を指す

パックス

「やうなのか・・・悪いこと、聞いたまつたな」

「人は申し訳なさそうにしている・・・といふか俺としてはいいでこんな話をしてしまつとは・・・。」

「申し訳ありません・・・」

暗いよちよつと?俺の身の上話を聞かせたから?

「気にするなつて、俺が自分の意志で話したんだ」  
この世界の常識は俺にとっては常識じやないからな

## キンゴーン・キンゴーン

授業が始まりそなので山を片付けてオルコットさんに「はい」自分の席に行つていただいた

「良かつたのですか?」

「良いんぢやない?別に隠せとは言われてないぜ、それにお前がつてしまべりたいだろ?」

「オルコットさんのデータを出してくれ」

「公表されているデータのみですか?」

「それ以外も出せる物はすべてだ」

「あの人によせれば「ISDが使える人間で自分を知らないなんてモグリ」つていいそうだしな。」

第4話へ続く

## ACT・03 「長い一日は終わらな」（後書き）

今日は短めですね、次回はひとと長めにします。

「意見」「感想をお待ちしています。

## ACT・04「やうやくついに終る」（前書き）

長いです、ひとつ原作とは変わっている部分が・・・

## ACT・04 「もう一度田舎へ」

次の休み時間一夏に押し倒され勉強は寮に行ってからと言つてからとなつた

「どうか・・・寮は2人一組の部屋だけど俺は一夏と同室か?」

その日の「HRの時間に

「これより再来週に行われるクラス対抗戦に出る代表者を決める」

クラス代表を選定し、ISで戦う。リーグマッチである。

「クラス代表とは、そのほか委員会への参加や生徒会への参加、まあクラス委員と思つてもらつて良い。自薦他薦は問わない、誰か居ないか?」

「俺はどいつもするかな。自薦はないな。

「赤城君を推薦します」

「はい?

「織斑君を推薦します!」

「赤城君を!」

「冗談じゃないぜ・・・

「オルコットさんを推薦します」

俺がそう言つた瞬間、クラス全員がこっちを向いた

「素人同然の一夏や自分より断然・・・適任かと」

少しの間が開いて

「ほかには居ないか？居ないのなら赤城、織斑、オルコットの3名を候補とする」

先生・・・そりや無いぜ・・・

さつき追つ払おうとしたのがあまり良い印象を与えていなかつたのかオルコットさんの怒りが爆発した。

「決闘ですわ！誰が代表にふさわしいかどうか決闘です！」

一夏の場合は売り言葉に買い言葉だらうな

「いいぜ、四の五の言つよりわかりやすい。翔も良いだろ？」  
はあ・・・とため息をついて頷いた

正直クラス代表なんて重荷は背負いたくないんだが  
一夏はやる気満々、意外と好戦的な性格だな  
「ハンデはどのくらいつけん？」

「あら、早速お願ひですの？」

「いや、俺がハンデをつけるためなんだが・・・」

この世界のパワーバランス考えてみると良い

「織斑君それ本氣？」

「女が男より弱いなんてISJができる前の話だよ？」

「女が男と戦争になつたら3日で女が勝つって言われてるんだよー」

笑い声に混じつてこんな声が聞こえた

「一夏、俺はハンデ無しでお願いしようつとおもうけ・・・」（バロツー）

織斑先生の出席簿攻撃・・・痛い・・・

と言うか田が怖いよ？

「お前は後で職員室に来い、連絡事項がある」

「ちょっと正気？ハンデ無しで戦わせるわけ？俺は一応攻撃パターンとか知恵袋には入ってるけどもISJは初心者だよ？」

オルコットさんが何か言いたげだつたけど織斑先生は

「勝負は次の月曜日に第3アリーナで行う3人は準備をしておくよ

う」

決定事項を告げるのみだつた

キーンゴーンカーンゴーン

LHR終了を告げるチャイムが鳴つた。

納得がいかないぜ・・・ハンデ無し？初心者だぜ俺は・・・。

「赤城、やはり今で良い職員室まで来い

連行？ですか・・・

職員室

「お前のハンデだが、ブラックバードを使用するな、ミラージュランサーF1を使用しろ、それだけだ」

「それだけですね？たしかにフォーマットやフィットティングもカットしてテストしてましたけど相手は代表候補生ですよ？」

そんな事だらうとは思つたけど

「私としては不本意ではあります、が仕方ありませんね」  
ほら。バックスだって不満そうじやないか。でも使用するなと言わ  
れたんだから仕方がない

「本来なら訓練機にでも乗せてやりたいところだ」と言わ  
れてしまつた

「ではこれだけなら自分は教室に戻りますが」  
職員室の空氣つて好きじゃないし

「あー・・・までお前に荷物が届いていたことを忘れていた」

「荷物ですか？」  
誰から？何か荷物が届く予定とか無かつたし

「放課後引き取りに来い、これが荷物の概要だ」

荷物区分：大型荷物

重量：250？以下

寸法：2300×800×1250（？）

「でかい・・・IS使って運べとでも言つたですか？先生・・・

「自分で考える」

マジー？

まあ呼び出しの後教室に戻つて終礼。長い入学初日が幕を閉じた・・

。

「これが寮の鍵です」

放課後、山田先生に渡されたのが寮の鍵  
1024号室と書かれていた

「一夏の部屋は・・・・・1025か」

もつとカードキーとかレーザーキーとかだと思つてたけど普通の鍵  
だね・・・

「お隣さんだな」

そうだね、でもね俺は元々 I.S 学園に居たわけでその間済んでいた  
のが1024号室で今日の朝に移動するかもしれないからつて理由  
でいつたん荷物を持って出たんだけど・・・」

さて寮に行こう

「待て赤城、お前まさか・・・・・さつきの話を忘れたわけではあるま  
いな?」

織斑先生・・・・あんたどうから現れた!?

「例の荷物ですか・・・・」解です、ごめん一夏。ちょっと時間かか  
りそうだ」

「気にすんなって、何なら手伝おうか?」

ありがたい申し出だけど

「いや、大丈夫だ。多分何とかなる」

学園本校舎裏に置いてあつた荷物

木のカバーを外すと・・・チタンカラーのバイクだつた

「CBR1100XX?・・・これはもしかして・・・」

俺の愛車だつたバイクじゃないか?

オードメーター（総合距離計）は000005・3? = 5・3? = 新車である。

違うか？

「あと2日でお前の戸籍と運転免許証が発行される、それはお前の身元引受人から来たお前の荷物だ」

なんというか、連絡が来た身元引受人が神様だつてことにびっくりだ、アフターサービスが何とかと言つてたぞ

荷物の中には一応必要な物が揃つてている、ヘルメット・グローブ・対衝撃用ジャッケツト・・・etc.

「これは・・・」

販売証明書

受け渡し：1998/04/05

輸入：ドイツ仕様

購入者：Akagi=Porsche・Kakeru

「俺なのか・・・？」

戸惑つていると

「とにかく寮の駐車場に駐めておけ」

そう言つて織斑先生は駐車場の場所を書いた紙を渡して行つてしまつた。

キーをひねると残念なことに必要最低限の燃料しか入っていないようで燃料系の針は力なく下にへばりつき赤いランプが点灯した

「押してくれ・・・」

エンジンはかかるけど何処まで燃料が入っているのか分からぬ以

上押していくしかないな。

思ったより重いよこれ。転生するまでは重いなんて思ったこと無かつたのに・・・筋力が変わったのかな？

「重いよ、乾燥重量（オイルやガソリンなど液体が入っていない重量のこと）で223？もあるんだもん・・・そりゃあ重いさ」と俺は絶贊涙目だ。

バイクを置いて寮の部屋に行くために廊下を歩いていると、一夏が部屋から飛び出してきた。

「あれ？一夏じさん、どうしたの？顔色が悪いけど・・・」

僕が言葉を詰ませた理由？

ドアを突き破る木刀が見えたから

「一夏、君はいったい何をやらかしたんだ？」

そう言いつつ俺はカメラを取り出してシャッターを切った  
カメラを何処で手に入れたかって？

さつきの荷物に入つてたデジタル一眼レフカメラだよ？

「頼む翔、助けてくれ！」

「涙目だね・・・」

「ちょっと待つてね」

問い合わせず自分の部屋に行つて荷物を置かないと

5分後

「さて、話を聞こつけないか」

問題の一人を僕の部屋に呼び間に僕が入った

要点だけ順を追つてまとめると

- ・一夏は部屋に行つたらルームメイトが居た
- ・そのルームメイトは幼なじみの篠ノ之 篓さんだった
- ・彼女はシャワールームから出てきてバスタオル姿だった
- ・篓さんは一夏と分かって木刀で襲ってきた
- ・一夏の部屋のドアは穴だらけ

と云つことになる

「まあ一概に一夏が悪いとは言わないけどね

正直じつちもじつひだな

「一夏の真つ直ぐなその性格はかうとして、一夏も男なら適当など  
ころで折れても良いと思つけどね

もちろん一夏だけ話悪いとは言わないので

「篠ノ之さん貴方も貴方です。確かにショックでしょう、その心中  
はお察しいたしますが、見ず知らずの暴漢ならまだしも幼なじみで  
しう篠ノ之さん? 居合わせたのが僕ならばまだしも幼なじみの一  
夏ですよね?」

「だがそれでも限度といつ物が！」

「もちろん羞恥心を捨てろとは言いませんが、貴方が使ったのは木刀ですよ？一步間違えば一夏が再起不能になるかもしない傷を負わせてしまうかもしれない武器です。それをよく考えてくださいね」

「・・・」

二人とも黙り込んでしまった

「じゃあ寮監に直談判に行きます」

「「く？」

間の抜けた声だなおい・・・

「今後このよくなーニアミスがないように織斑先生に直談判しましょう。まあ元々俺も会いに行かなければいけない用事があつたからそのついでだ」

で、結局

「無理だな、開いている部屋がない」

職員室で寮監を聞くと織斑先生だと言つことで聞いてみたのだが・・・

「それは、部屋の都合がつくまで待つていろと言つことでしょうか？この場合しかるべき措置としては自分と織斑君を同室にするべきではないでしょうか？何かあつてからでは遅いですよ」

普通に考えればそつだ、部屋割りで一人一組になるにしても男同士の方が良いはずだ。

「お前に部屋にもは諸般の事情により遅れていたルームメイトが明日来る。だから当分の間は無理だ」

「自分も織斑君と同じような生活と言ひたいでしようか?..」

それはそれで良いか・・・じゃなくて・・・それはあまり好ましくない

「いや、男だ。フランスから来るそうだ。データは渡しておいたはずだ」

男?三人目!?

「部屋にあつたクリアファイルですか?..」

「そうだ」

見てなかつた・・・といつか一夏の騒動の仲裁でそんなの読んでる暇なかつたし。

「時間的余裕が無く見ていませんでした・・・」

ガンッ

出席簿つて堅いんだよ?知つてる?でも一夏の時よりは少し軽い気がする。

「ところでお前のプロフィールは書けているのか?足りない部分を補充しておけと言っておいたはずだが」

「こちらになります」

赤城＝ポルシェ・翔の公式プロフィール

年齢16歳

身長168cm

体重55kg

生年月日 2010/04/02

出身 日本

住所 日本国IS学園 学園寮1024号室

所属 超大天才篠ノ之ラボ テストパイロット

ISミラージュ ランサーF1(FX/G2/CR-200)

第3世代IS

「こいつがISの詳細ですね、篠ノ之博士からデータが届きました」

IS名：ミラージュ ランサーF1(FX/G2/CR-200)

タイプ：電子戦対応型マルチロールタイプ

専用装備：Vランス（槍）

その他拡張装備：可変出力レーザー砲2連装

イプシロンMK-7：レールマシンピストル。単射もしくはフルオート。

RCSバーストシステム：超高精度指向性爆薬を使用して急激な方向転換を行うシステム。

「ふざけているのか・・・あいつけ」

そう言って僕のプロフィールにある「超大天才篠ノ之ラボ」の「超大天才」に2本線を引いて消していた。

ちなみにそこには篠ノ之博士が書いたんであって俺じゃないぞ。

部屋に戻ってきて

「申し訳ありません……」

俺の部屋は一人で使用することが判明、部屋の用意ができるまではやはり一夏は篠ノ之さんといっしょになると云つことを俺は頭を下げながら伝えた

「いや、俺たちのためにそこまでしてくれただけで十分だ、俺の方にそ人任せにしちまつてすまん」

「やつだぞ、むしろそこまでしてくれて私としてはうれしい」

とにかく僕は明日来る転校生?の受け入れのために荷物をまとめて整理しなければ

第5話へ続く

## ACT・04「やつあべー田田終」（後書き）

次回はちょっと早いけどあの人（の名前）が出てきますよ  
そして若干主人公が壊れます

「意見・感想をお待ちしています

## ACT・05 「荷物整理してたひが無くした物とか出でるやうな?」（前書き）

今日は短めですね

## ACT・05 「荷物整理してたら昔に無くした物とか出てくれるよね？」

荷物を片付けると言つたか着替えとか神様が送つてくれなかつたら買わないといけなかつたな。

今はとりあえず学園が用意してくれた服と最初から着てたジャージにハーフパンツというラフなスタイルに着替えたよ、だつて制服のままだとだるいから。

「バックス。とりあえずシャルル・デュノア君のデータを出してくれ」「了解しました」

「デュノアって事はデュノア社と何か関係が？」

「学園に通知されたデュノア君のデータはこれだけ？」  
データがあからさまに少なかつた、もつ少しデータがあつても良いはずだ

「はい、それ以外のデータは見あたりません」

ちょっと彼のことを調べてみる必要がありそうだ。

「バックス・・・フランス政府のデータベースにアクセスしてこの子のデータを出してくれ」

「はい、ただいま」

調べることには罪悪感はなかつたけど、むしろ事實を知つてからは罪悪感が僕を支配していた。

「これは・・・」

本名・シャルロット・デュノア、性別・女性。

フランス政府ではなくデュノア社のデータベースで行き着いた答  
えが「極秘」とされた資料の中には日本に出現した特異ケースの  
2名に近づくためにE.S学園に男として潜入させるとの資料だった。

「織斑先生に報告いたしますか？」

「いや、ちょっと様子を見るよ、親が社長だからってここまでする  
とは思えない」

「了解です」

バイクと一緒に送られた段ボールには様々な物が入つていて  
荷物の中にあの俺をここに飛ばした狂気の神様からの手紙が入つて  
いた

「親愛なる翔君へ

やつほー..ビーだいE.S学園は？楽しんでるかな？楽しめるよね？  
君なら..

さてと、今回この手紙を出したのには訳があるんだぜ。

翔をこの世界に送るときに話せなかつたその世界に起きてこいる問題  
についての話なんだぜ！

基本的にこの「世界」って言うの物は情報をベースにして構成され  
ていてだな、詰まるところパソコンと同じ2進法でデータの書き換  
えができるんだ

まあ基本的には干渉できないはずなんだが誰かが干渉を始めてしま  
つたようなんだ。

そこで君たち2人の出番で分けなんだぜー。ブラックバードには「イ  
ンフォメーションダイバー」って言う機能があつて軽微な改ざんを  
修復する能力を持たせてあるから使うと良いぜ。

もし大規模な改ざんの場合は待機状態で「インフォメーションリカバリ」って言う機能を使用してくれ。早くして数ヶ月、遅くても数年で修正はできると思うから。ダメなら連絡くれ、あたしが干渉して直す。

翔の友人 神さま より

と並んでいた。

「俺にはさっぱりだ

分からぬぞ、つまり俺は一夏のフォロージャなくて情報修正のために転生したのか。その前に数年つて……。

「翔は記憶できていないのですか？」

「いや、もう文面は覚えた。俺は記憶できて理解に苦しんでるんだ

「私としては理解しかねます」

君は機械だからね……。

「お疲れのようですね、シャワーを浴びることをオススメいたしましたが

「うん、そうしようかな

」」」のシャワーはこわゆるコニッシュバス的な物。

「今日は疲れだぜ……」

シャワーを浴びた後、髪を乾かしていると

・「ンンン・

「はい？」

「翔？飯に行こうぜ」

一夏がご飯に誘いに来てくれたようだった

もう良い時間なんだね

「分かった、今行くよ」

第6話へ続く

## ACT・05 「荷物整理してたら昔に無くした物とか出て来るかな?」（後書き）

さて、原作から少しずつ脱線し始めてしまいましたw  
リウカが来るまでにちゃんと元に戻せつと思しますw

「意見・感想をお待ちしております。」

## ACT・06 「3人目の男子」

一夏 side

「翔？ 飯に行こ」ひぜ

もう一人の男子である翔は意外とつきあいやすい性格で良かつたよ。

「分かつた、今行くよ」

出てきた翔は・・・何というか瞬間とは別人だつた。

「どうかした？」

学校だとメガネをかけていたはずなのに今はかけてない・・・

「いや、なんつーか・・・メガネ・・・」

してないと女みたいだな

「メガネ？今はコンタクトしてるんだ。メガネは度が強くて疲れるからコンタクトなんだ」

「そりなのかな」

「氣まずいぞ、この空氣は

「もし、女みたいって言つたら・・・」

かわいいけど目が怖いぞ！

「いつ……言つたら？」

何かを持つまねをして

「投げる……」

何を！？何を投げるんだ？

「わっ……そ、うか……」

「まあ、そんな非常識な人はいないと思つけど……ね

俺の一田田は恐怖という言葉で締めくくられたのだった。

一夏 side end

翔 side

翌朝、僕は篠ノ之さんと一緒に朝食を摂っていた。

「篠、これ面白いな！」

篠ノ之さんと「//」二ケーションを取りつとする一夏だけだと

「……」

完全無視の篠ノ之さん

「翔、これ面白いよな？」

俺に意見求める気ですかこの人！？

「ほんと思つよ、もっとも俺は別メニューだけね」

朝食がバイキングだったため俺はパンにしていた。

メニュー：パン（食パン・菓子パンなど）×4・紅茶・サラダ・フルーツ（バナナなど）・ハム・ウインナー・目玉焼き

一夏たち？和食メニューでメインは焼き鮭だな

「そうだった・・・」

今更気がついた！？ダメだ、俺の中で一夏の注意力がストップ安・・。

「ねえねえ、あの子たちが例の子かな？」  
「一人は織斑先生の弟さんだつて、彼も強いのかな？」  
「いいなー篠ノ之さんだけ一緒に食べられて」  
「私も声かけてみれば良かつた・・・」

など外野がつぶやいているんだけど一つ言いたい、こっちに聞こえてるよ。

「織斑君、隣良いかな？」  
「座席？あーそつか言ってなかつたね  
俺・篠ノ之さん・一夏（窓側から見て）

の順に並んでるんだ

声をかけてきたのは同じクラスの仲良し3人組、おい・・・一人制  
服じゃないのが居るぞ。

「へ? 別に良いけど?」

「「よしつー」」

3人は嬉々として座るけど、僕の隣はどんどん不機嫌に・・・。

篠ノ之さん、早食いは体に毒ですよ?

「わー織斑君て朝すつごいたべるんだー」

「男の子だね」

「そうか? 翔だつて変わらないし・・・」

そう言って一夏は俺の方を・・・その視線の先にいる篠ノ之さんを  
気にしてあげて!

「俺はパンだけどな・・・低血圧の性つてやつで朝食べないと動け  
ないから」

俺の平均血圧? 同年代の男性より結構低いらしい、詳しいことは説  
明されたけど気にしてなかつた。

「私は先に行くぞ」

「カタ・・・

篠ノ之さんはソソクサと食べ終わって席を立つた

「ああ、また後でな」

「じゃあ俺も食べ終わつたから行くわ」

最後のフルーツを食べきり俺も席を立つた

気になることの真相を確かめるために

一  
篠ノ之さん

「ああ・・・赤城・・・君か」

詠葉に詠まりまくりだな

「呼びにくかったら翔で良いよ、まあ赤城でもポルシェでも翔でも好きに呼んでもらえればいいよ」

篠ノ之さんて歩くの早いよ

「篠ノ之さんは・・・――夏のことが好きなのかな?」

「なほせり」

なに！？地雷？これが地雷なの？いや待てむしろこれは照れ隠し！

「そーか やっぱり好きなんだ」

「ノーブル」

真っ赤になつて下を向く篠ノ之さん

「手伝いましょうか?」

「へ？・・・・どうして・・・」

間の抜けた返事をする篠ノ之さん

「俺が手伝おうと」の結論を出したの理由は3つ。1、篠ノ之さんは一夏がほかの女子と話すと機嫌が悪い。2、篠ノ之さんは一夏の前で挙動不審である。3、それを見抜けない一夏は恋愛に鈍い可能性がある。結論、手伝ひのが妥当」

まあ原作を分かつて居るところのもそつだけぬ（うる覚えです）

「私は・・・・私は・・・」

ふらふらと顔を真っ赤にしてどんどん早足になる篠ノ之さん・・・

暴走した蒸気機関車か？あの人は・・・と言つか競歩なら絶対に優勝できるだ。

朝のＳＨ

山田先生が

「今日は皆さんに新しいお友達を紹介します」

昨日の人か・・・シャルル君だったかな？

ちなみに今日は入学2日目である

「シャルル・デュノアです。フランスから來ました。諸事情により1日遅れてしましましたがよろしくお願ひします」

男子だった。

それも

「男子！3人目の男子！」

「しかもウチのクラス！」

「しかも美形！守つてあげたくなる系の！」

騒ぐね・・・そんなにはしゃぐと

「騒ぐな、静かにしろ」

教室は織斑先生の一聲で静まつた。まさに鶴の一聲だな

「今日はI S 実習を行う、各人はすぐに着替えて第2グラウンドに集合」

「それから、織斑、赤城・・・」

ん？やけに尻すぼみだな

「「はい」」

「赤城、お前・・・本当に赤城か？眼鏡はどうした？」

あ、忘れた

「寮に忘れてきました。コントラクトがあるので支障はありません」

ほら、暴走した篠ノ之さんを直してたら時間が無くて・・・

「そうか、まあいい。お前たち一人は『ユノアノ面倒を見てやれ、同じ男子同士だ。解散！』

さて一夏の時間もないだろうし急ぐか

「君が織斑君で君が赤城君？初めましてぼく・・・」

律儀にも挨拶してくれるのか・・・品が良いといふ人は違つね心に余裕が・・・思つてて自分が悲しくなつた

「ごめんね、この時間は挨拶どころじゃないんだ、男子は移動しないといけない、女子が着替え始めてしまうからね」「は

そう言つて僕はデュノア君の手をつかんだ

「ひつひつときて男だつて事を残念だと思つよ、俺は

一夏・・・君は女の子の方が良かつたのか？

「聞かなかつたことにしておく、それより急ごひ

廊下を出て真っ直ぐアリーナへ

「俺たちはアリーナの更衣室で着替えるんだ実習のたびにこの移動らしい」

ちなみに聞かされたのは今日の朝、SHIが始まる前だつた・・・

「う・・・うん」

顔が赤いよ？デュノア君

「どうかしたか？そわそわしてるけど

落ち着きがない・・・いやあれだけの男女比だと正常か？

「トイレか？」

一夏・・・

「それは『テリカシー』がないぞ……男子でもだ」

できれば更衣室まで一直線に行きたかったが……

「噂の男子発見！」

「しかも3人！」

マズイ、これはマズイ。寒風までの時間がないつて言つのに

「一夏、『デュノア君、突つ切るよ……』」

「ヒーは人が集まらないうちに突つ切る方が吉だ

「いたー！ ちよーー！」

「者ども、あえ、あえ！」

「ヒーはいつたいいつから武家屋敷に改装したんだよ

「見てみて、赤城君と『デュノア君』が手をつないでるー。」

「赤城君の銀髪も良いけど、金髪も良いわねえ！」

勘弁してくれ……俺たちは授業に遅れる=生命の危機になるんだ。

「あと2秒で右の通路に入る」

一夏が頷く

「行くぞ……」

デュノア君の手を取つて走り出す

廊下は走るなと書いてあるが気にしないで走る

「あ、逃げた！」  
「追いかけるのよー」

ふと昔テレビでやっていた「逃走何とか」という番組、タイトルが思い出せないな。

ハンターから逃げるやつを思い出した。

「なんで、みんな騒いでるの？」

走りながらデュノア君の疑問

「そりゃあ、3人だけだからね、IS男が・・・」

自分の体を見てハツとするデュノア君、男としての自覚あるよね？

「あ・・・ああ、そうだね」

嘆くように一夏が

「（汗）じゃ何処に行つてもウーパールーパー状態だ」

「何それ？」

わかりにくいたとえをするな一夏は・・・デュノア君が分かってないぞ

「昔に流行った珍獣？つて所」

3人で全力疾走して逃げ切ることには成功したけどかなり時間を口  
スしてしまった。

ACT・07に続く

## ACT・06「3人目の男子」（後書き）

「」意見」「感想をお待ちしています。

## ACT・07 「プロンド貴公子は博識」

「移動のたびにあの逃走劇だとやつてられねー」「正直俺も一夏と一緒に叫びたかった……」

逃げ切つてアリーナの更衣室に着いたときには時間ぎりぎりだった。「ごめんね、いきなり迷惑かけちゃって」

一夏も着替え出す

「気にするなって、男2人しかいなくて辛かつたんだ」

「そうなの?」

「そうなの?つてデュノア君……一人もいれば助け合えるつて?末だ2日目でもこれだけめいってるんだよ?死にそうだよ?」

「一夏の言つとおりだな。俺は赤城 翔。翔で良いよ」

「俺は織斑 一夏、一夏つて呼んでくれ、よろしく」

「うん、よろしく。翔と一夏だね。僕のこともシャルルで良いよ」

3人で握手したんだけどさ

「時間ヤバイから早く着替えた方が良いな」

俺は基本的に朝出かける前にIISスーツを着ているから良いけど一夏は着てない。

いやIISスーツは実習日に1日中着てても大丈夫だつて山田先生が昨日言つてたし。

「うわ!」

何事かと思つて振り向くとシャルルが一夏を見て顔を真つ赤にして

いる・・・思春期か・・・。

「着替えないの？」

聞いてみた

「え？ う・・・うん。 着替えるよ・・・でもその、あっち向いててね」

思春期なんだね、そういう思えばいや正直君は何者かは分かってるから。

「いや、人の着替えはじろじろ見ないけどね、とつとと着替えない」と鬼教官が・・・

まあ着替えるのは一夏もだけどねと思つてたら

「そつそつ、織斑先生に怒鳴られないよつこしないとな、特に一夏は・・・」

振り向いたとき

「何かな？」

シャルルはもう着てた

「着替えるの超早いな・・・なんかコツとかあんのか？」

「い・・・いや別に？ アハハハハハ

笑顔が引きつってますよ？

「これ、着るときにはだかつて言つのが着づらいんだよな、引っかかるで」

まあ一夏のスースはデータ取り用の試作品みたいなもんだしね

「引っかかつて！？」

シャルル・・・やっぱり思春期なのか・・・顔が真っ赤だぞ？中学  
生じゃあるまいし。

「確かに着るときに引っかかるだらうね一夏のは。俺のはオートフ  
ィットティングだし、出かける前に着てるから楽だよ」

「翔のスーツって特注品なの？」

シャルルとも一夏とも違う俺のスーツに興味を示したのは  
「俺の？俺のは篠ノ之ラボのダークブルー・デビル・タイプSつて  
やつらしき」

まあ俺も篠ノ之博士にあつたのは2回だけだけビ、おつとの話は  
追々語るとしてよ。  
「篠ノ之ラボって、まさかあの東さんなの？」

一夏は面識があるのか・・・あー篠ノ之さんのお姉さんだからね  
「俺は篠ノ之ラボのテストパイロットだから」

「言つてなかつたつけ？」

「唚然とする一人をよそに僕は更衣室から出て行つた

「ちよつと待つてくれよー。」

2分後第2グラウンド

「今日は実機による実習とフォーマットとフィットティング機能の学

習を行ひ

実機は打鋼とかリヴァイヴとかがあるけど基本的にフォーマットや  
フィットティングはオフでやるだろ? じゃあどうやって学習するわけ?

「赤城、お前が専用機を使用してフォーマットとフィットティングを  
実戦しろ」

「俺が実戦ね・・・っておい! ?

「//マークでですか! ?」

「返事は「はい」だ」

怖いよ?

「俺の//マークは通常のフィットティングとは少々異なりますよ?」

「一応言つておく、同じではない  
「かまわん、やれ。それから実戦でそのままフォーマットとフィッ  
ティングを行うようにするためにデュノア、お前が赤城の相手をし  
ろ」

「はい」

「そうですか、素人でも専用機持ちは専用機持ち扱いなんですね

「納得できませんわ!」

「ふむ、だがお前では赤城の相手にはならん

わつきまで空氣だったなオルコットさん

「ふむ、だがお前では赤城の相手にはならん

あーいいますか貴方・・・

「ならば今すぐにでも赤城さんと模擬戦をさせてください」

俺を見る織斑先生

「俺は先生の判断にお任せしますけど?」

見られても困るという表情で帰しておこう

「決定事項は決定事項だ、赤城とオルコットの試合は次の月曜日だ」と  
つまり6日後ということである

「では赤城、デュノア模擬戦を始めろ」

「「はい」」

俺はミラージュを起動させた

「WAKE UP NOW . . . . . Wait . . . 日本語にローカライズを完了しています . . . . システムの起動を完了しました . . . . パーソナルコードを登録しています . . . 」

「ここまで表示されてミラージュが展開された

「現在、初期化を完了しています . . . . パーソナルネーム:ミラージュ ランサー F1、使用者:Akagi=Porsche. Kakeru、システムバージョン:ver1.1、ファイットティング作業を開始しています。ファイットティング作業中ですが行動が可能になりました」

「 いけます

時間かかるよな

「 行動開始までがネックだな、では模擬戦を始めろ」

俺は上空で待っているシャルルの方へ飛んでいった

「 手加減はしないよ?」

「 もちろんだ

イプシロンMk・7（フルオートもしくは単射のレールマシンピストル）を装備、一気に上空に駆け上がる。

「 早い!?

ミラージュは軽量な機体に高出力ブースターを持ち1秒以下で音速を突破する機体だ。

イグニッショングーストを使用すると最高速まで3秒とかからない。

「 これくらいで驚いてたらやつてけないぜ」

太陽を背にしてるのでシャルルからは見えにくいはずだ

そこから、ブースターを切つて・・・自由落下!

「 現在の加重：-3・5G、速度：マッハ0・2、イプシロンMk・7：RDY GUN】

「 FIRE!」

フルオートでイプシロンを発射。若干シールドにダメージを与えた  
がそれだけか。

「僕だつてだてに代表候補生なんじゃないよー。  
アサルトカノンを構えて応戦するシャルル

「早いけど、避けられない訳じゃない！」

左右に若干スライドさせてシャルルの砲撃をよける

姿勢を水平に戻した後バレルロールを組み合わせて後ろに付いていたシャルルの背後に付ける。

バレルロール・ロールと機種上げ（ピッチャップ）を同時にを行う空戦機動の一つ。

が、シャルルは思いつきり急制動をかけて俺の射程から逃げる仕方なく俺はインメルターンを使用して縦方向にUターンを行う。インメルターン：180度ループ・180度ロールを順次、もしくは連続的に行つことで縦方向にUターンする空戦機動である。

「逃がさないよー！」

〔警告、敵IISよりロックオンされています〕

シャルルのIISの重機関銃が火を噴く

「RCSバースト！」

バーン！バーン！という音共に俺は180度ターンをした。

「なー？」

イグニッショングーストを使用して一気に音速に達して

空にソニックブームを残して一気にシャルルとの距離を詰める

「俺だつて終わらない！」

がアサルトカノンの弾が俺に命中、大きく煙が上がるが・・・。

「フィットティングなびにシステムの最適化が終了しました。全武装が使用可能です、この表示を消すには確認ボタンを押してください」

「チェック（確認）」

第一形態完了！  
ファーストシップ

「さて、本気で行こうか！」

接近戦武器のマランス（槍）を開幕、イップシロンと組み合わせて中距離から一気に近距離戦に持ち込む。

「見える武器がすべてじゃないぜ！」

一度マランスで攻撃の後マランスをわざとはじかれるその後可変出力レーザーで死角を狙うが避けられた

「中々やるね」

プライベートチャネルでシャルルが話しかけてきた。

「コイツは一応ルーキーだけどそれなりには動く！」

問題は・・・ダミーアウトシステムを作動させてるってことかな。  
・

ダミーアウトシステム：機体ダメージ量が任意に設定した値に達したとき擬似的に戦闘不能判定を出して機体の過度な損傷を押さえ

るシステム。

ダミーアウトシステムは基本的6分の1程度までシールドエネルギーが減らないと作動しないが、今はシールドエネルギーが10%喪失しただけで作動停止するようにしてある。

今のシールドエネルギーから見てあと一回でも攻撃を受ければ終了だ

いつたん距離を取りレーザーで牽制しつつ距離を詰めていく

「それじゃあいつまでたつても決着付かないよー。」

そう、シャルルも巧みに攻撃をかわしながら反撃するのである。

その攻防が経過して5分

「いいかげん終わりにしたいぜ」

いつたん垂直上昇後自由落下しながらチャフを放出

チャフ：電波を反射する物体を空中に散布することでレーダーによる探知を妨害する防御兵器

このチャフは基本的に電波妨害用に放出したのではない。

このアルミニウム<sup>チャフ</sup>片に向けてレーザーを照射すると・・・反射を利用して屈折、そしてこのチャフを制御することでその威力を何倍にも跳ね上げる・・・成功すればね

いや、撃ったよ・・・ただグラウンドを切り裂いただけだったけどね

でもチャフのおかげでシャルルが混乱している間に懐に飛び込めたが決定的な一撃の前に逃げられた。

そして反撃を食らって・・・

「あ・・・・」

- 戦闘終了 -

「愚かな」子息は3億ドルの戦闘機と共に東シナ海に沈みました」

「戦死通知！？」

ミラージュの要らない機能・・・戦死通知

「何それ・・・」

唚然としてると

「早く降りてこんか馬鹿者共！」

織斑先生に怒られました。

いや、なんか最後の戦死通知でどつと疲れた。

何とか2日目を乗り越えて寮に戻ってきた。

「おじやまします・・・」

シャルル？

「遠慮しなくても良いよ、今日から君の部屋でもあるんだ」

鞄を置いて僕はPCの電源を入れる

「シャワーを使うなら先に使って良いよ、俺はちょっと強のデータをまとめないといけないから」

そう言って僕は今日の戦闘データをまとめるために光磁気ディスクをパソコンに入れた。

「じゃあ、お言葉に甘えちゃおつかな

そう言ってシャルルはシャワールームに入った。

ACT · 08 に続く

## ACT-OCA「プロトド貴公トは博識」（後編）

「意見・「感想をお待ちしております。」

## ACT・08 「孤独の交差点」（前編）（前書き）

昨日は更新できずスマセン  
長くなつたので前編・後編に分けました。

## ACT・08 「孤独の交差点」（前編）

俺はすぐにデータをラボに転送。

「バックス、ダニーデータを開示して警戒モードで待機だ」「了解です、では警戒モードに切り替えます」

バックスに指示を出して俺は制服からジャージに着替えた。  
ピペ・ピペ

俺の携帯だ

「はい、赤城です」

電話の相手はとってもハイだった

「やつほー ポル君！ 束お姉さんだよー！」

いつになくハイな篠ノ之束さんだった

「博士・・・ いつになくハイですね・・・」

正直そのテンションについて行けないよ？

「ヤーかな？ とこひで今日は//ラージュの初陣だったんだね、黒ちゃんはずっと出番無しだけど」

そう言つナビ、あんまり使えないんだよ・・・ //の使用規定がどうのいのとめんどうだから。

「ええ、とつあえず織斑先生から//ラージュのフォーマットとフィッティングを行えたことでしたので」

「とつあえずそのデータは受け取ったからこちで分析するね。後はもうちょっと黒ちゃんのデータがほしいけどな、とつあえず今日出てきてくれる？」

もちろんこれは無視できないので出るしかないよな。

「了解です、とつあえず〇時過ぎで良いですね？場所は・・・」

「とつあえずル・マンまで来てね」

「ル・マン・フランスにある中小都市。ル・マン24時間耐久レースで有名。

「フランスですか・・・とつあえず了解です。あと例の図面できたんですけどそれの採点もお願いしますね」

とつあえずバックスで出るしかないか

ガチャ

シャルルがシャワー室から出てきたらしい  
「分かったよ」。それじゃあよろしくねー

その音を察してか束さんは電話を切った

「あー、はい、了解です」

俺が携帯をしまおうといつといひでシャルルが出てきた

「電話でもしてた？」

「うん、ラボの人とね、実戦データを見たけど機体とのマッチングは良いけどもう少し機動に慣れろって言われたよ、もっとも打鉄よりはデータ敵に戦果はあるらしげけど」

俺は手早く着替えをまとめると

「じゃあシャワー浴びてくるからそのうちに見られたくない本とかは隠しとけば？」

ほら思春期の男子にはいろいろあるんだろとつ

「本？」

あれ滑った？一夏は鉄板ネタとか言つてたけど・・・

「うん、一夏が言つてたぞ・・・俺はよく分からなが多分工 本じやないか？」

なんか字が違う気がするけど気のせいだら

「やつそそそそそほんある分けないじゃないか！」

ないだろ？」の反応を見ると・・それ以前にシャルルは男じゃないし・・

「とりあえず入ってくるよ」

もちろんバックスは腕時計でも防水なので気にせずシャワーをするバックスの予測だと問題は付けっぱなしのP.J.だ。もしかしたらあの中に入っているデータに手を出すかもしれないといつ。

「どう思う？」

「彼女がデュノア社からのスパイでは無いと言いますか？」

「それはそうだが、もし違つたらどうする？デュノアはただの広告塔として娘を利用してるだけかもしねなー」「

俺の否定も残酷だが、最悪の事態はもつと残酷かもしねない。

「それでは「私たちデュノア社のテストパイロットは男です」と世界に発表するべきではありませんか？」

だからといって実の娘を・・・広告塔として晒すようなことをするだろうか？

「確かにデュノア社は第2世代I.S.に関しては世界トップクラスだ、しかし第3世代となると話は別だ・・・しかし、そこまでして企業競争に勝ち残るつとする親は・・・討つ・・・」

「翔、あまり過激なことをするのはオススメできません」「分かつてる」

シャワーは流しつばなしでとりあえず服を着たそのときだつた。ピー！-と、いう強烈なビープ音・・・P.C.のダミーデータを弄ると出るHマークセージだ。

ガチャ・・・

「何やつてるんだ?」

シャルルが俺のPCの前で硬直していた  
「いや・・・その・・・」

PC画面は真っ暗な画面に赤く浮かび上がる文字で「Donner une punition pour les preneurs (罪人に対して罰を下せる)」

「各國語バージョンなんて作るんじゃなかつたかな・・・」

フランス語の警告にビックリしてこる様子・・・

「そう言えばこれ連続フラッシュパターーンの後でるんだった  
1秒間に100回で紅と黒を交互に切ると何とも残念な仕様。

「いや、そのどんなパソコンなのかな?って思つてちよつときわつたら・・・」

「これはちょっととどきつよりPCのメインプログラムに入らないと鳴らないアラームなんだけどね  
もちろんダミーデータのだけど

「あ・・・」  
すっかり黙り込んでしまつシャルル

「デュノア社の意向は俺の眼中じゃないし、まあ何をしようとしていたかは聞かない。ルームメイトのパソコン出してちょっととは見たくなれる気持ちは分からなくもないから」

だいたいは察しが付いている。

「何処まで知ってるの？」

仕方ない、俺の願いとはちょっと外れてしまったのだから

「全然知らないよ、デュノア社社長には男子の子供はない事しか知らない」

そこから導き出される答えは簡単だ。

「そりなんだ・・・そこまで分かつて・・・」

「俺だつて信じたくなかった・・・」

「翔、私が話してもよろしいですか？」

バックスが助け船を出してしまった

「誰！？」

そりやあ予想外の声がすれば驚くわな

「驚かせて申し訳ない、バックスちゃんとした姿の方が良いと思うが・・・」

「分かりました、では・・・」

俺の腕時計が光る

ここで知つていておいてほしいのはバックスは普通のISでないとだ。

管理人格という人格を持っている・・・人工知能AIに似たものだとか・・・そのため人間と直接的対話を図るための手段として人間と同じような姿になるのである。

「初めてまして、私は翔のISであるブラックバード（FX/SR-71/BT）の管理人格でBlackbird Auto Con-

t r o 1 s y s t e m、頭文字を取つて B - A - C - S と申します。訳あつてこのような姿になることができますが、普通の I S とあまり変わりありませんので気軽に話してくださいね「

二口二口とよく喋るバックス、ちなみに今は省エネモードらしく身長が 140 センチくらいで和服姿である・・・何故和服が黒で赤いラインが入っているかは聞かないでくれ・・・。

「おしゃべりなのは俺があまり喋らなかつたからだ・・・」

ポカーンとしてる

「えーっと・・・」

やつぱり着いてこれないわけだ

「シャルルとの模擬戦に使つたのはもちろんこの子じやない、バックスはちょっと特殊だから篠ノ之博士がそのサポート用に作つてくれたんだ」

「へー、翔つていつたい何者なの?」

驚くのは分かるけど半分呆れられてるよな

「えーっと・・・篠ノ之ラボ専属テストパイロット兼デモンスト레이ター兼学生かな」

考えつくだけの肩書きを並べてみた

「シャルル・デュノア、残念ながら翔は記憶を失っています。さらに私はラボからこの学園でテストを目的に翔に託されたのでそれ以前の翔については何も知らないのです」

バックスがフォローしてくれた

「記憶がない?」

「まあ、その無いな。なんといつか気がついたら名前すら覚えてなかつたよ。身分証があつたから自分の名前として認識できるだけ

だし「

そつ言つて俺は免許証を出す

「じゃあ家族とかは?」「

家族か・・・こっちには居ないな

「調べてもらつたけど居ないって言われた。まあいても覚えてない  
し・・・」

「こちらが何者かは明かしました。今度は貴方が喋る番ですよ、シ  
ヤルル・デュノア」  
えーっとバックス?

「僕は・・・」

バックスは言わせたいみたいだけビ・・・

「シャルロット・デュノア、デュノア社のテストパイロット。デュ  
ノア社社長の娘だが正妻の娘ではない・・・これだけ分かつてれば  
十分だ」

俺はシャルルの言葉を遮った

「翔!どうして言つてしまふのですか?」「

バックスが抗議の声を上げる

「お前は情報を聞き出したいのか?それともただのサディストか?  
どつか分からん」

たしかに情報は欲しい、回りくどく聞くのはもう良い知つている情  
報はすべて出す。

「翔、ごめん。騙すようなことをして」  
シャルルが謝る

「だから謝るな、俺に謝るな。むしろ俺が謝らないといけない事をした」

戦略を間違えたよ・・・

「うふ・・・・」

「さてと・・・ちょっと出かけてくるよ、朝までこま戻るから心配しないでいい」

そう言つて俺はバックスを待機モードに戻す

「え？出かけるってビリ?」「？」

そりゃあ驚くか

「野暮用でひょっと遠くまで・・・」

そりゃあ驚くわ屋根に上る

ACT・09に続く

## ACT・08 「孤独の交差点」（前編）（後書き）

「J意見・「J感想をお待ちしております

## ACT・09 「孤獨の文豪」（中編）（前編）

長くなりすぎました。  
結局3部に分けます。

## ACT・09 「孤独の交差点」（中編）

屋根に上ると織斑先生が居た

「こんな時間に何処へ行く気だ？赤城」

嫌な人に見つかつたな

「ちょっと散歩に行つてきます」

もちろんISでね

「許可した覚えはないが」

「そう言えば許可居るんだつけ？」

「散歩ついでに篠ノ之博士と雑談してきます」

篠ノ之の名前が出たとたん織斑先生の態度が変わる

「また呼び出しか・・・全くあいつは」

入学式までの1ヶ月間に2回ほど俺は篠ノ之博士に呼び出され無断外出して大騒ぎになつたのである。

「伝言があれば伝えておきますが・・・今日は他の用事もあるんで手短になる用件をお願いしますね」

そう言つて行こうとする手を捕まれて引き留められた

「まったく、明日の授業に支障を出すような事にならないようじる、いいな？」

織斑先生はそういうと寮に戻つていった。

「さてと、行きますかね」

「翔、昨日追加された機能で現地での移動手段を利用できます。駐車場に向かってください」

新機能、バイクを使用できる?。

「バイクを持つてくのか？重労働だぜ？」

持つのは大変だが、バックスは特に問題としてないようだ

「そうではなく、バイクをISの装備として登録します」

また凄いことだな

「つまり、ISのバススロットにこいつを入れるって事か？」

俺は無理だと信じたい・・・だってバススロットには容量制限がある。

一定以上は入らないのだ

「私は通常のISよりもバススロットを多く持っていますので容量的には問題ありません」

凄いことではあるわな

「とりあえず入れとくか・・・」

バススロットにバイクを入れると僕はツインドライブの起動手順をスタートした。

「ツインドライブ起動チェック」

「シンクロシステム正常起動しました。//ラージュ ランサーF1（FX/G2/CR-200）との同期を開始しています・・・同期完了しました、同期率は100.5パーセントです」

俺を光が包み俺は人型モードのバックスと同じ姿になる。

そうバックスは人型では女性なのである・・・つまり何故か俺は今、体は女性なのである。

「チェッククリストクリア、起動！」

そして俺をISが包んで起動完了である

「ツインドライブモードで起動しました、私としてはツインドライブで飛行しなくても間に合う速度だと思うのですが・・・」

「さあ、俺も分からぬよ、博士がご氏名だし、仕方ないんじゃないか？」

「最初は嫌がつていませんでした？」

確かに最初にツインドライブで起動したときはショックだった。

手は震える、足はガクガクとともに男とは思えない容姿に愕然ともしたけど、セカンドシフト後の機動性が格段に違つてたりするという利点の方が多いかった。

「さてと、新記録を作りますかね・・・」

数分後コーラシア大陸のはるか上空、成層圏を超音速で飛行する未確認飛行物体が観測されたとかされないとか。

ル・マン郊外

「お久しぶりです、博士」

俺は篠ノ之博士に指示された場所で彼女と会っていた。

「久しぶりだね～いつ以来かなあ？」

いつも通り？の熱烈な歓迎を受けながらとりあえずデータを渡す。

「これが第4世代の設計図で名前がビックバイパーとエクスピードです」

この2つは俺が趣味で勝手に設計した第4世代ISである。

「ほうほう、前回の第3世代の時より完成度高いねえー」

束さんはデータをすぐに展開しチェックを始めると同時に追加装備をブラックバードにインストールしていく。

ここで悪魔がでてきた・・・

「ショッショー来たんですかあー？」

中学生くらいの女の子がでてきたがこの子が悪魔なのである。

実は過去2回ともこの子にいじられているのである。

この子は新乃 圭ちゃん、いわゆる「女の子が好き」と言つタイプの人だ。

「圭ちゃんー？いやー・・・ひやん・・・あ、ちょっとーほんとにやめてくださいー！」

ここでもう一度言つたが今俺は女性であると言つことであ

る。

「ちゅうとーへビ！」をわざつてゐるわけ！？離せー！」のエントア！？

！」

速攻で後ろに回られて胸を以下略・・・・

対処方法？簡単です一本背負いで投げる！

「離れろ・・・この変態があ！」

そして蹴る！ひたすら蹴るのである・・・え？死なないか？大丈夫だと思つよ

「あ～良い・・・この蹴られる感覚う・・・」

いつそのこと殺してやりたい・・・イカシニイカン、俺の暗黒面が顔を出すところだった。

とつあえず適当に氣絶させるか・・・

「さてと、ポル君の部屋にいる子なんだけど、知つてるよね～？」  
とつあえず圭ちゃんをしばき倒したところで束ねさんに言われた  
「はい、とつあえずは嫌われる算段を付けてます。最悪は逃げます」

そういうと束さんは爆笑した

「あーははは、きびしーねえ。いやーやっぱりポル君を学園に送つて正解だつたね」

俺は覚えてないというか知らんけどな

「とつあえず、この後は罪人達の贖罪を・・・ちよつとね

意味深に笑うと束さんは

「でもね、あの子の気持ちも分かつてあげた方が良いと思つけどね

」

それは…の話だ。もしも彼女が・・・

「やつですね、心得ておきます」

「そうそう、今回は新しい装備も追加したから  
そういうと束さんは気絶している圭ちゃんを引きずつてラボに行つ  
てしまつた。

「さてと、じゃあ行きますかね

「本当に行くのですか？翔」

彼女を送り込んだ真意を確かめに「デュノア社社長宅に行く

「行かないといけない気がするから・・・かな」

思つたより近かつた件について・・・

「ここが情報収集を兼ねるから单一仕様能力じゃなくてストラトス  
プロトティー・ポを使用する」

「了解、第2形態移行、ストラトス プロトティー・ポ展開します」  
ストラトス プロトティー・ポ・第二形態から使用可能になる偵察  
特化型装備。マイクロカメラの映像を機体に投影することによって  
あたかもそこに何もないように消えたり、センサー波吸収塗装によ  
る完全なステルス形態で無人機のセンサーには一切反応しない。た  
だし機体のエネルギーと電磁パルスの関係で膨大なエネルギーを使  
用する攻撃装備は使用できない。单一仕様能力（漆黒ノ霧）との併  
用はできない。

監視カメラ、赤外線アクティブセンサーに空間波動センサーと・・・  
ここは機密の軍事研究所か？

「面倒だ、一気に突つ切る」

「あまり得策とはいえませんが・・・この場合ストラトス プロト  
ティー・ポの性能テストにもなりますね」

イグニッシュショーンブースト  
瞬時加速で一気に加速、目的の部屋まで2秒とかからない、むろん  
センサーには反応はなかった。

ACT・10に続く

## ACT・09 「孤独の交差点」（中編）（後書き）

「J意見・「J感想をお待ちしております。」

## ACT・10 「孤独の交差点」（後編）

「お恼みのようですね、『テュノニア社長』その男、シャルルの父は眞間だところに血室のソファードで頭を抱えていた

「誰だ！？」

来客の予定はなかったようだな

「息子さんの学友ですよ、ちょっと彼のことでお話があつて参りました」

月の光で逆光だったので2・3歩前に出る

「日本から来たといふのか？まさか・・・超音速機を使用しても無理だ」

驚愕するシャルル父を前に俺は

「私は少々常識という概念がありませんので」

そういうてメモリーカードを投げて渡した

「つまりんことで娘を大変な目に遭わせる事はなことの御うのでせめてもの慈悲です。第3世代IISの非武装仕様です」「もちろんただでくれてやる訳じやない、ちゃんと俺だつて言わなきゃいけないことがあるからな

「何故私たちここまで・・・」

俺はブラックバードを解除、残念ながらツインドライブ機の待機状態ではまだ女性なのである・・・悲しい

「もちろんくれてやる訳じやない、あんた・・・自分の娘を道具に

してでも会社を守りたいのか？

そう聞くとシャルル父は沈み込んだ表情になった

「私は、役員会の決定を覆せなかつたのだ・・・」

そうしてシャルル父はポツポツとその経緯をしゃべり始めた。

自分の妻は子供を産めない体质であつたこと、シャルルは不倫相手の子ではあるが正妻は彼女を引き取りたいと言つていたこと、しかしデュノア社の役員会で日本における特異ケースとの接触にちょうど良いと言つことで彼女を利用しなければいけなくなつたこと、その罪の意識から彼女に冷たい態度をとつていたことなど。

「なるほどね、利益優先のくだらない理由ではあるけど、一応父親としての自覚はあるわけだ・・・」

まあ合格点かな。

「シャルロットは・・・どんな様子なんだい？」

まあ父親として当然か

「あんたにそれを心配する権利はないと言いたいところではあるが・・・まあ良いだろう、俺に女子であると早速ばれたな、まあ俺はちよつと事情が事情だから仕方ないと思つが」

なんだか・・・ただの男前女子的な風に見られてる？

「そうか・・・君なら仕方ないとな・・・」

残念そうではあるがある程度あきらめが見えた。

「俺は帰るけど、やっぱりそのメモリーカード返してくれ。第3世代と第4世代のデータが入った豪華版に交換だ」

とりあえず父親としての自覚があるだけマシかな

ISを開く、寮に帰宅しないと面倒な時間だ・・・。

俺は空を飛んでいる感覚が好きだ、大気を切り裂いて超音速の壁を破るイメージが好きだ。

残念なことはブラックバードの高速モードはマッハ7・1（時速8697・5？／h）で飛行し東京・パリ間なら1時間ちょっとと言ふことである。

日本・IS学園 学園寮にて

寮に戻るとシャルルは寝ていた。そりやあそつだ、午前4時を回つてるんだから。

俺は適当に着替えるとベッドに横になった。

「ドツと疲れるのは残念なんだけど、訓練後みたいで心地良いな…」

「私には理解しかねます」

そして俺は若干仮眠をとつたと言ひ睡眠時間で翌朝を迎えたのだった。

午前6時

「じう・・・ちゃ？」

俺が紅茶を入れているとシャルルが目を覚ました

「おはよう、シャルル。目覚めの紅茶でも飲むかい？」

神様が送ってくれた荷物の中に何故かティーポットと茶葉が入つていたことはびっくりだ。

というかあの段ボールは無駄に容量がある。某狸じゃなくて某猫の4次元何とかと一緒に？

「それじゃあもうおうかな」

昨日の夜あんな事があつたとは思えない顔だな

「はい、かしこまりました。なにかご要望は？」

俺も寝ぼけていた気がする・・・

「じゃあミルクティーをお願いします」

まあ黄金比とかはもう一つの小説の主人公にお願いするとしてまあ「紅茶の入れ方」なる本が段ボールから出てきたのも驚きだよな。

「さて、昨日の件でシャルルのお父さんと会つてきましたよ、それで・・・」

やつぱり話しておるべきだと思つて話やつとしたんだけじ言葉が出ない

「昨日、父から電話があつたよ。今までのこととその・・・これがうらやましい話をするかの事で」

シャルル父も行動派なんだなと思つたが・・・もつと早く行動すべきだと思う

「これから、どうするんだ? もしかして本国に・・・」

シャルルはうつむきながら

「呼び戻されるだらうね、そしたら最悪は牢屋行きかな」

困ったように笑うシャルル

「問題ない。シャルル、君はここに残れるよ」

俺は平然と言つた。

「え! ?」

俺は生徒手帳の特記事項の欄を開く

「お父さんに呼び戻そうと言つ動きもあるって言われたんじゃない? でも、IIS学園校則特記事項、「本学園に在学中の生徒はその在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない」というのがある。つまり戻そうとしても学園の校則で禁止されていてこれを破ることはアラスカ条約に違反することになるんだ。3年間は

安心だし第3世代ならもうとっくに試作段階に入つても良いくらいのデータは与えてきたから平氣だよ

嫌われることを目的にしたけど結局はこうやって協力してしまう俺つて結構情けないやつ

「翔つて、嫌われようしたり、でも僕のために動いてくれたりして一体どっちなの？」

ここで本心を話すべき何だろうか・・・

「俺は、誰にも好かれる資格はないからね・・・ちょっとナーバスだつただけだ」

言つて恥ずかしくなつた

「うーん、もう無理かな？」

なんか幻聴が聞こえた？

「シャルル？ 何だつて！？」

うろたえる俺にシャルルは

「秘密だよ」

そういうつて微笑んだ

結局好意を持たれたのか否か・・・もしかして俺は自分の恋愛には

鈍感なのか！？

ACT・11に続く

## ACT・10「孤独の交差点」（後編）（後書き）

「意見」「感想をお待ちしています。

それから1週間後、ついにクラス代表決定戦が始まる

アリーナピットにて

「ホントでなくって良かったのか？シャルル」

シャルルはクラスメイト数人から今からでも遅くないし立候補すれば？というすすめを断り一夏や俺の練習に付き合ってくれた。もつとも本人の意向を尊重したいと推薦がでなかつたことが奇跡といえるだらうけどな

「僕は翔が代表の方が良いと思うからね」

頼むから俺の負担を増やさないでくれ・・・

さて、もうすぐ一夏のISGが到着するのを待っているんだけど・・・  
こない

試合順は

オルコット VS 一夏

オルコット VS 僕

一夏 VS 僕

の順番なんだけど一夏のISGが到着しない・・・

「織斑先生、まだこないのですか？」

俺は仕方なく内線で確認をとるが

「まもなく到着する、もう少しします」

と言わされてから30分経過・・・

「もう試合順変えた方が良いんじゃないかな？」

一夏が若干不安そうに言った

「それは同意できるけど、あの人気が納得するかな？」

「オルコットさんは残念ながら納得してくれないだろうな・・・こないという理由なら

この一週間は篠ノ之さんから剣道を、俺とシャルルからはIRSの基礎と操縦について訓練を受けた一夏はまあ平均くらいにはなったかな？

「織斑君！きましたよ織斑君の専用IRS！」

山田先生のアナウンスと同時に搬入扉が二つに分かれて開いていく出てきたのは白いIRS。

「織斑君専用のIRS白式です！」

山田先生の声は若干うわずつていて聞き取りにくかったがしつかりと名前が聞き取れた。

「しかたない、一夏のフォーマットとファイットティングの時間くらいは稼いでくるよ。良いですよね？織斑先生」

その時間を稼げれば一夏も御の字だろう

「わかった、では試合順を変更してオルコットと赤城の試合を行つ

俺はミラージュランサーF1を開きカタパルトの上に乗る

「翔！」

シャルルに声をかけられた

「ん？」

「勝つてね！」

いやですっていつたら後は怖そつだしな

「全力は尽くすさ」

さて大空に行きますか！

カタパルトとブースターの推進力で一気に加速

まあすぐ止まらないといけないけどね

バックスは基本的にミラージュの補助として音声でのアナウンスを行います。

「ずいぶんと用意に時間をかけていましたのね。てっきり逃げてしまつたのかと思いましたわ」

「ずいぶんと好戦的な人だな

「遅れたことは謝罪しますが、後の文句は一夏に言つてください。彼のエサがこなかつた故に僕が先陣を切らなければいけなかつたのですからね」

「ここは冷静に相手の出方をうかがうか・・・いや初段でのレーザーライフルを撃つてくるだろ?」<sup>レーザーライフル</sup>ここは自動回避ONで後部警戒は半自動制御、そっちがレーザーなり<sup>レーザー</sup>こちらもレーザーで行くか・・・。

「では、墜落なさい!」

その言葉と同時にレーザーライフルを撃つてきた。

「Ennaga

自動で緊急回避旋回バンクを多めに取り相手の死角に入る。

「どつちにしろ君の遠距離射撃型じゃ・・・俺は倒せないけどね!」

まずは相手の照準能力を見て決める!

ブチッ・・・

なんか聞こえたけどオルコットさんが黒いオーラが・・・オルコットの暗黒面が顔を出した!?

「潰して差し上げますわ!-!」

相手のレーザーライフル、スター・ライトmk-2の攻撃を左右にかけてかわしつつ2門ある可変出力レーザーを右は最小の22%で照準機、左は58%でメイン武装それぞれの役割を持たせて反撃

「踊りなさい、わたくし、セシリ亞・オルコットとブルー・ティアーズの奏でるワルツで！」

「ワルツね・・・俺は円舞曲よりヴァイオリンソナタに見えるけどな！」

通常ヴァイオリンとピアノの一重奏の演奏形態によるソナタを指す。ピアノ伴奏のないものは無伴奏ヴァイオリンソナタという。

イプシロンMK-7を長距離射撃モードで展開、フルオート射撃で反撃だ！

「撃墜される前に降参した方が良いと思つけど」  
プライベートチャネルで話しかけると

「冗談じゃありませんわ、降参するのはわたくしではなくあなたの方でしてよ！」

相当イライラしてるな・・・無理もないか現状で1発も当たってない上に俺の反撃でシールドエネルギーは相当削られてるからな

彼女の攻撃で最大の強みはアンロックユニット、ブルー・ティアーズ（以後ビット）と言ひらしいがそのビットが縦横無尽に俺に向かつてレーザーを撃つてくるのだがまあパターンにはめて攻略可能だ！

「近づいたらすかさずランスで破壊！」

ビットは操縦者が指示を出さないと動けない、つまりこれはそこそこができやすくなるわけだ

ビットはすべて破壊した、これでもうと思つたら

「4機だけではありませんのよ！」

今度のビットはミサイルだった

「自動回避します」

「めんどくせー武器だなオイ」

フレアを放出、効果無しか・・・レーダー式？じゃあチャフだが・・・いやあいつが指示を出してるのなら手はある！

大きくインメルターンを行いオルコットの頭上に来るよう1発を引きつけて・・・ランスで破壊、あたかも直撃したかのように黒煙が上がる。

「これで彼も・・・え！？」

「ダメージ無し、戦闘続行可能です」

黒煙を切り裂いてオルコットとの間合いを詰める。彼女は驚いて最後の1発を自爆させてしまった。だがここは時間稼ぎだからここで攻撃しない、一気に加速してソニックブーム（衝撃波）を浴びせるだけだ。

超音速飛行中に発生する轟く様な大音響のこと。衝撃波以外の原因で生じる単発的な大音響を含める場合もある。

「翔、もうすぐ戦闘開始から30分になります。ここまでくれば彼もフィットティング完了でしょう」

よし、ここでケリを付けるか

「装甲を全展開、第2形態へ移行」

彼女の問題は火力とビットの優秀さに頼りすぎて・・・接近戦のバリエーションが少ないとだらうな・・・。

「第2形態に移行します」

ミラージュ・ランサーF1が形を変え始める。  
セカンドシフトである。

「まさか、セカンドシフト！？」

細長かつた翼がデルタ形状になりさらに機体カラーが変化していく。  
つや消しブラックヒルバーからホワイトを基調にブルーのライン  
が入る。

「これがミラージュ・ランサーF1の第2形態「ミラージュ・タイ  
フーン・トランシュ3（FX/EF-2000/X-31）」だ」

第2形態から使用可能になる長距離狙撃レーザーライフル、ペガサ  
ス Mk.107を展開。  
オルコットまでの距離は約400メートル、まあ中距離射撃型なら  
有効射程範囲内だ。  
「近すぎる。いつたん引くしかないな」

攻撃をかわしつつ後退し相手の有効射程範囲外に逃げる。  
そこからペガサスを使用して仕留める。

「距離1800メートル、大気状態正常、ペガサスMk.107：  
RDY GUN」

「出力30%で固定、敵IS追従ロックOK、FIRE！」

思つたより大きな爆発音だったね・・・いや一瞬空中に巨大な火の  
玉が形成されてさ・・・やっぱり25%にしておくんだった・・・

狙撃から接近戦用までこなすこのペガサスMk.107は標的の動  
きを予測して補助するというシステムがありそれを最大限に發揮し  
て今回は仕留めてくれた。

「試合終了、勝者赤城＝ポルシェ 翔」

俺の勝ちを告げるアナウンスが流れた。

「悪いけど、今のは偶然勝てただけだからね。俺がいつでも強いと思わない方が良いよ」

オープニングチャネルでそれだけ言つと俺はピットに戻った。

戻つたら一夏に

「お前、それは負けたやつが言つ台詞みたいだつたぜ」と言われた

まあ俺と彼女じゃあクラス代表だと俺は彼女が良いと思つけどな

「俺の負けなんぢゃないかな? とりあえず俺は一夏のフィットイングの時間を稼いでただけだし、チャンスを4回くらい無駄にしたら後で織斑先生に怒られるかもしないよ」

彼女が第2形態に移行していれば別だがこの場合フェアじゃないからな。

「よく分からぬけどサンキューな」

そういうて一夏はオルコットさんとの戦いのために出て行った。

ここでI-Sを解除したら一気に疲れるんだろうな  
シャルルの方を向いて・・・

「ちよつと・・・落ちるわ・・・」

やつぱり意識が遠くなつた。

「ちよつとどうしたの! ? 翔! ?」

疲れていたのだろう、30分ほど俺は気絶していた。

## ACT・11「クラス代表決定戦 - Fire Ball -」（後書き）

「意見・「感想をお待ちしています

## ACT・12 「クラス代表決定」

結局俺は一夏とオルコットさんの試合が決まり前に医務室に寝かせられていた。

氣絶から回復した俺は織斑先生に呼び出された。

「第一形態移行できることを何故黙っていた」

しかも部屋には俺と織斑先生一人だけである。

「先日篠ノ之博士に口止めされていました。しかし公での形態移行はある場が初めてです」

篠ノ之博士という名前が出たとたん織斑先生が頭を抱え始める。いや偏頭痛持ちだとは聞いたことはなかつたけどね。

「そうか・・・最初から参加させるべきではなかつたかもしれんな。  
・・そのほかに何か特筆すべき事はないか?」

あ、あきらめて話題を変えた

「では、簡単にミラージュ ランサーF1（FX/G2/CR-200）の第2形態ミラージュ・タイフーン・トランシル3（FX/EF-2000/X-31）の機能説明をさせていただきます」

第1形態からの相違点は以下の通りである

- ・この形態では可変翼からデルタ翼になり、カラーがホワイトをベースにブルーのストライプが入るようになる。
- ・単一仕様能力の出現（ただし使用可能なだけである実際に使ったわけではない）。

装備の変化

・VR ランサー・V ランスの正常進化形態。展開装甲の採用による攻撃範囲の増大。

・イプシロンMk・037：第一形態から使用可能になるイプシロンMk・7の正常進化形。単射もしくは三点バーストモードのみとなる。威力はほぼ同じだが命中精度は200%増し。

・ペガサス Mk・107：イプシロンMk・037と同じく第一形態から使用可能になるビームアサルトライフル。機能としては単射・フルオート・三点バースト・スナイパー（狙撃専用モード）の4つとなる。ただし拡散形、中央集中型など数種類のバリエーションがある。

など

「ちなみにハードとソフトを含めて改良点は1700箇所以上に及びソフトウェア面では第2形態のデータを第1形態での運用時に適応し自己進化を・・・」

と言いかけたところで

「赤城・・・」

「はい」

困った顔をする織斑先生

「あと、どのくらいで説明が終わる?」

あとどれくらい?

「あと2時間程度です」

これでも簡易的なのですがと付け加えるとゲンナリという表情になつた

「・・・もういい、十分だ」

説明終了。

「とりあえず、改良点の他に問題点も浮上していますので、それを改善しない限りはクラス代表機としての運用は難しそうですね」

例として操縦者へのキックバックのフィードバックである。ISはキックバックと呼ばれるGや衝撃を吸収するアンチフィード

バック機能というものが存在するが、現在のミラージュはアンチファイードバックの値が2：1程度、つまりIS事態が受けるダメージの半分を操縦者が受けていることになる。

もちろん制限を超えたファイードバックは無効になるのでそれ以下に押さえられてはいるがやはり細部を微調整しないといけないらしい。「その件に関しては問題ない。第一形態<sup>セカンド・シフト</sup>移行した時点でお前は候補から外れている」

要するに1年生でセカンド・シフト＝1年生の現状機の中でも最強という図式ができるので学年全体の士氣に関わると言つていい。

「了解です。ではオルコットさんがクラス代表になられるのですか？」

そう聞くと織斑先生は

「それは、本人達に聞くことだ。お前はもう少し休んでから寮に戻れ」

そう言うと織斑先生は立ち上がった。

織斑先生が医務室を出るとき入れ替わりにシャルルが入ってきた。シャルルの情報によると

結局一夏は良いところまでオルコットさんを追い詰めたものの零落白夜の特性を理解していなかつたため負けたそうだ。

「俺は織斑先生の判断でクラス代表候補から外れたみたいだよ」お手上げという感じで両手を挙げて見せた

「あーやっぱりね・・・織斑先生が管制室で見てられないくらい震えてたから・・・」

俺生きて良かつたな・・・。

「でもまあ・・・一夏には会つておこう・・・」

シャルルには先に部屋に戻つてもらい俺は掛けられていた制服に着替えて一夏を探しに行つた。

・・・今思つたんだが寮にいるのかもな・・・まあいい。にしてのものど渴いたな・・・おーまだこの甘つたるいコーヒー売つてるんだ、買つしかないなこれは。

アリーナ更衣室・・・いた。

一夏はなんといつたものか・・・「燃え尽きたぜ・・・真っ白にな・

・・・」的な雰囲気なんですけど。

おかしいな、不満が残る終わり方だつた気がする。

「一夏、おつかれさん」

そう言つてさつき買つた甘いコーヒーを差し出す。

2つ購入しました

「あ・・・ああ、サンキュー」

疲れた体には砂糖が良いぞ!と誰かが言つてた気がする。

「それ、メチャメチャ甘いからね  
あ、むせた。

「なんだよこれ、ホントにコーヒーか?」

おう一コーヒーだ

「M×M×コーヒーだ、疲労回復には良いぞ」

「コーヒーは正直どうでも良い、それよりも  
「さてと・・・代表決定戦最後の一試合・・・やりますかね」  
いや、ミラージュの実力だと射程外攻撃で簡単に落とせるけど、近接形と戦つてみたいというのが本音でもある。  
「マジでやるのか?」「

無言で頷く  
ACT・13に続く

## ACT・12「クラス代表決定」（後書き）

「J意見・「J感想」「J感想をお待ちしています

## ACT・13「クラス代表決定」（前書き）

ちょっと私用でパソコンの前に座れず更新が遅れて申し訳ありません。  
ん。

## ACT・13 「クラス代表決定！」

数分後、第2アリーナ。

「手加減は・・・しないぞ」

俺は高速Vランスを展開。

一夏が近接形なら、接近戦で戦うのが筋つてもんでしょう！  
雪片式型とVランスではリーチのあるVランスの方が有利ではあるが、零落白夜のおかげでかなりの不利である。  
つまり、俺は一夏の攻撃を避けながら反撃の機会をつかがうしかない。

まあそこはイプシロンMK・7との切り替え攻撃で凌げばいいが。ミラージュはPCIに加えて補助翼による空力制御も行っているのだが通常のISより旋回・ロール特性が飛行機に近い。

空中静止時はPCI、飛行時はPCIに加えて補助翼制御による空力補助。

一度距離をとつたところで瞬時加速イグニッシュション・ブースト

俺は旋回する白式を追うためハイ・ロー・ローを使用して急旋回。  
ハイ・ロー・ロー・目標機を追う際に自機の速度が優速である場合に余った速度を上昇することで高度に変換し一旦速度を落とし、そこから降下することで再び速度を得ながら追随する。詳しくは検索を推奨。

白式に追いつく前にイプシロン・MK7で射撃を行い白式の旋回方向を調整。

もう一度ハイ・ロー・ローを行い白式の真正面に出る。

「そろそろ逃げてないで来たらどうだ?」「

∨ランスと雪片式型が火花を散らす。

スピードでは俺に分があるがパワーでは若干白式の方が上のようだ。  
まあ第4世代だしね出力が違う分けだし。

「クロック・アップ、ステップ!」

「クロック・アップ、ステップ!」を実行しました」

クロック・アップ・ミラージュ・ランサーF-1はブラックバードよりも低燃費性能を重視した機体であるために出力的に制限がある。この制限を3ステップで解除する機能である。ただし解除すると燃費が悪化する。

これで白式と同レベル。

一度距離をとり一夏が中段の構えから一気に間合いを詰めてきた。剣道の基本動作だとスタンダードなものが攻防共にスキができる構えだ。

雪片式型を∨ランスで受け流しつつイプシロン・MK7を発射。これで相当なダメージを貰えたはずだ。

しかし一夏はひるまずそのまま雪片式型で押してきた、そして「零落白夜」発動。

- 戦闘終了 -

「戦死通知・愚かな」(子息は3億ドルの戦闘機と共に東シナ海に沈みました)

そしてピットに戻ると・・・関羽がいた・・・いや織斑先生だ。

「お前達、無断でアリーナ使用の上模擬戦まで行うとは良い度胸だな」

「最後の1戦が残つていました」と答えては見たもののねえ

一夏はそりやないよつて顔だし

「次はないぞ、気をつける」

それだけ言つと行つてしまつた。

「それだけ?」

拍子抜けした感じ・・・。

一応丸く収まつたのか?あの関羽が?まあ良いか今日は疲れた、部屋に戻るか。

ガチャ・・・

「ただいま」

シャワールームから音が聞こえるのでシャルルはシャワーだひつ。

上着を脱ぎ自分のデスクの椅子にかける。

アリーナ更衣室でシャワーを浴びたので特にすぐシャワーを浴びた  
いつて訳じやなかつたしね。

そして今日の実戦データを記録したファイルを暗号化回線で篠ノ之博士に送つた。

部屋着に着替えた後ポツリと呟いた。

「今日の夕飯・・・何にしようかな・・・」

ほんの1ヶ月前までは食べられればいいと考えていた人間の言つことじやないよなんなんて思いつつ雑誌を開いた。

雑誌を読み始めて多分2～3分くらいだと思つ。

「あ！？・・・」

シャルルの声？

そう思つてその方を向くと・・・バスタオル一枚のシャルルが・・・

・・おい、服着ないと風邪引くぞ？

気まずい沈黙・・・

「な・・・なんか狙つた？」

狙うつてレベルじゃないが・・・

「え！？あ！ちょっと見ないで！！」

顔を真っ赤にしながらシャルルが叫んだ。

「あ・・・ごめん」

イベントですか！？

こんな恥ずかしいイベント無しだろ・・・。

ACT・14に続く

## ACT・13「クラス代表決定!」（後書き）

「意見・「感想をお待ちしています

ACT・14 「転校生は専用機持つ」 1(前書き)

今回が3回目になります

俺は何度も夢で見る光景がある。

「スホーイT-50だぜ！本国でも配備が始まつたばかりの機体が何で・・・畜生！撃つて来やがつた！。こちらワイバーン01攻撃を受けた、繰り返す攻撃を受けた！、反撃許可を！！」

自分が座っているのは戦闘機の操縦席

「ウイザード02が撃墜された、繰り返す、ウイザード02が撃墜された、反撃許可を！」

そして撃墜されていく仲間

「ダメだ、日本の領空内ではない、反撃は許可できない、繰り返す、反撃は許可できない」

そして非常な上司

何故、こんな場面が見える、確かに転生する前の記憶はおぼろげだ、むしろ自分の名前とかバイクとかしか覚えがない。  
何故だ？何故こんなにも自分は無力なのか？

守らなければいけないものがあるのに…

そして夢から覚める。

時間は午前5時、息は乱れ心拍は通常よりもずっと乱れている。  
仕方ない、ちょっと早いけど走つてくるか。

俺の日課は朝5時15分から30分ほどランニングをしてくる」と  
だった。

だだつ広い学園の敷地を一周走るのである。  
もちろん全力で。

まだ寝静まつてゐるので寮からでるまでは隠密行動である。  
ほら、セキュリティがかかつてゐるから窓からでる。

その後はいつも通り走つて・・・こやちよつと遠回りをして「ひみつ

かな。

- 25 分後 -

「ハア・・・・ハア・・・・ハア・・・・」

田課のランニングを終えた後ちょっと歩いて疲れをとる。

「毎日『ご苦労なことだな、赤城』」

歩いてると立木の陰から織斑先生の声がした。

「田課ですかね・・・疲れててもやります」

立ち止まって返事をする

「まだ玄関扉はロックされているはずだが?」

確かに、玄関の扉は6時からしか開かない

「窓は自由ですから」

そういつて僕は歩き出した

「・・・それもそつか」

後ろの方で織斑先生がつぶやいたのが聞こえた

部屋に戻つてシャワーを浴び制服に着替える。

P.iP.iP.i

「メール?」

a r . n e . j p】

タイトル：F w . パーティー

添付ファイル：ナシ

本文：本日午後5時より織斑一夏クラス代表就任記念パーティーを食堂で開催します。多分皆さん暇だと思うので参加してくださいね（^ - ^）b でわでわ

「暇か・・・」

さて、今日も騒がしい一日が始まるか・・・。

朝のS H R

「では、一年一組代表は織斑一夏君に決定です。あ、一繫がりで良い感じですね」

と山田先生がクラス代表の決定を告げていた。

「先生、質問です」

とてを上げたのは一夏

「はい、織斑君」

「俺は昨日の試合に負けたのに何でクラス代表になってるんですか？」

「それは・・・」

「それは私と翔さんがが辞退したからですわ」

山田先生が言いかけたところでオルコットさんが割つて入った

「まあ、一夏は俺に勝つたしね。戦術バリエーションさえ良くなれば第4世代のパワーで押せるんじゃないかな？」

多分それでいいけるだろう。

「それとですね・・・その翔さん、先日のご無礼を申し上げました事をお詫びいたします」

なんか改まつて謝られた・・・

「気にしてない、それに言うのなら時間と場所をわきまえた方が良いと思つ……」

ほらあの三国志の英雄、織斑先生がね……  
バコンッ

いつそう鈍い音が教室に鳴り響いた。

### 3時限目「I.S実習」

織斑先生が整列した俺たちの前に出る。

「では、これよりI.Sの基本的な飛行操縦を実戦してもう。赤城、織斑、オルコット、デュノア、試しに飛んでみる」

指名された……

「はい……」

「分かりましたわ」

「はい！」

俺、オルコットさん、シャルルの順な、一夏は返事ナシ  
オルコットとシャルルは即座にI.Sを展開

俺はね……とりあえず第一形態で展開、その後はまあ状況に応じて第二形態に。

「セットアップ、ミラージュ・ランサーF1」

一夏は……遅れてるまあ仕方ないか昨日の今田だし。

「よし！……うーん、えっとお……あれ？」

なかなか展開しない。もたもたしてると関羽……じゃなくて織斑先生に

「どうした？何をもたもたしてる、早くしろ。熟練したI.S操縦者なら展開まで1秒とかからないぞ」

ほら言われた。でもこの人容赦ないよな……実の弟でも

「……集中……来い！白式……」

やつと一夏を粒子が包み白式が展開する

「・・・よし、飛べ！」

織斑先生の声で俺たちは飛び立つ  
出力的に優れるのは白式へミラージュへブルー・ティアーズへリヴァイブ  
アイブの順になるはずなのが一夏はやはり不慣れなせいか最後尾  
を飛行中

「遅い、何をやつしている！スペックでは白式の方が上だぞ」  
通信回線から一夏にお怒りの一言が・・・やっぱりあの担任容赦ないな

「自分の前方に角錐を開拓させるイメージ・・・」「一くんよくわかんねえ・・・

なんだよそれ・・・と思うのは俺だけ？

「俺はISを自分自身の体だと思つて動かしてるからなあ、イメージと言わても普通に右手を動かすとかのイメージと変わらないぞ「外骨格」と言つよりも体の一部といった方が良いのかもしれない。」「ワードスケーリング

「僕もそこまでとは思わなかつたな・・・」

なんかシャルルに呆れられた・・・。

「一夏さん、イメージはしょせんイメージ、自分のやりやすい方法を模索する方が建設的でしてよ」

なるほど、確かに建設的ではある。

「だいたい、空を飛ぶ感覚自体がまだあやふやなんだよ。何で浮いてるんだ？これ」

あー一夏にはそう言う事を理解する機会が少なすぎたって事らしいな  
「まあ頭で分かっていても理解していないからじゃないか？まあわざりにくいつて言つのが一番の問題だが」「

見るだけで頭に入つてくるとかじやないしな

「その、よろしければ放課後に指導して差し上げますわよ」

あー原作的にはその流れなんだよな良かつた俺に向かなくて・・・

どうか先日のあの宣言はやめてほしかったな。いやSHRの後平謝りに謝られて半泣きになり・・・なだめるのが面倒だった。

その頃、学園に転校生が来ていたことをまだ俺たちは知らなかつた。

ACT・15へ続く

ACT・14 「転校生は専用機持ち」 1(後書き)

「意見・「感想」「感想をお待ちしています

どうも1週間が8日になってしまった作者です。  
なので1日ずつ投稿が遅れています。

転校生は置いておくとしてアリーナ上空にいる専用機持ち4人は次の指令を受けていた。

「よし、急降下と完全停止をやって見せる。目標は5?だ」

まためんどくさいことを・・・

「じゃあ俺は先に行くぞ」

そう言って俺は機体を右にロールさせ、背面状態で降下開始

「制動開始位置まであと5 . . . 4 . . . 3 . . . 2 . . . 1 . . . 0」

バックスの表示が0になると同時にブースタと尾翼が半自動制御で最適な制動をかける。

「制動完了、現在完全停止中です」

「モードリリース。Fモードに移行

「Fモードに移行します」

飛行のために出ていた多方向推進翼が格納されスッキリとした外観に戻る。

面倒くさいことに神経使ったな・・・なんて思いながら俺の後に降りてくる専用機持ちを観察する。

オルコットさんが降りてきて、次はシャルルか・・・。

まあ流石は代表候補生って感じだな。

ちゃんと止まるしね。

そして・・・一夏はまだつかな・・・と思つて一夏の方を向いた瞬間

ドーン!

とこう音と共に砂埃が空高く上がる。

「痛いぞ、アレは・・・

顔面から突っ込んだみたいだし。

「・・・一夏!」

そう言つて飛び出していく篠ノ之さん

そして

「織斑君!」

山田先生も様子を見に行く

あ、一応織斑先生も行くんだね

俺?まあ一応行つとくか心配ではあるし。

砂埃がはれた後にはどでかいクレーターが形成されていた。  
流石はシールドバリアーが守つているだけあって白式には傷一つ無  
い・・・というか汚れもない。

「痛つてー・・・死ぬかと思った」

一応無傷の一夏を見て不安そうだった篠ノ之さん・山田先生の顔が  
ゆるむ。

「馬鹿者、グラウンドに穴を開けてどうする」

織斑先生・・・ちょっとは一夏に優しくしても罰は当たらなこと思  
うよ?・

「すみません・・・」

一夏がいつたん上昇、クレーターカラ上がつてくる。

そしてさつきまでは緩んでいた篠ノ之さんだったのだが

「情けないぞ、一夏。昨日私が教えてやつたり」

昨日・・・えーっと「地上の少し手前で」うスパッと止まるんだ  
つてアレか。

一夏は何を考えているのか難しい顔をして篠ノ之さんを見る。

「貴様、何か失礼なことを考えてるだろ?」

その顔だけで分かるのか・・・幼なじみ恐るべし。

「大体だな、お前という奴は昔から・・・」

小言が始まろうとしたとき篠ノ之さんを押しのけるようにして一夏の前に現れたのは

「大丈夫ですか？一夏さん。お怪我はなくて？」

「あ、ああ、大丈夫だけど・・・」

「まずは恐怖心の克服かな？基本的に俺とシャルルが教えるのは銃器と格闘戦だけだし・・・どう思う？」

俺の横に降りてきたシャルルに聞いてみた

「そうだね、やっぱり恐怖心の克服も重要だけいままずは座学を・・・いや、一夏が補修にならない程度の能力を『えるためにシャルルと俺は一夏に1時間ほどの座学を教えている。

そんな頃を考えていたら

「この猫かぶりめ！！」

「鬼の皮を被つているよりはマシですわ！！」

と篠ノ之さんとオルコットさんで口論になつてました・・・。

その後武装展開の実習では一夏がオルコットさんに睨まれてたし・・・。

謎だよね女の子って。

アリーナからの帰り道でシャルルに

「翔はどうする？僕はこのまま教室に戻るけど

「俺はちょっと専用機の調整をしてくるわ。今日のデータを見る限り想定機動力の75%くらいしか発揮できなかつたからその原因を

確かめたい

ついでにデータも送信したいし。

「分かった、じゃあ先に行つてるね」

調整と行つても特殊な工具を使用する訳ではなく整備室のモニタリングシステムを活用したかつただけだからである。

「やっぱりバイパスの取り回しだよな。処理速度は想定よりも高い値を示してゐるから良いとして・・・」

現状ではアラを探して修正、またアラが出るから修正の繰り返しがないからな

「システムは最適化されていますし、やはり後は高機動時のテストをしてみないと何とも言えませんね。今のところ私よりも機動型の方向に振つてゐる機体ですので私のデータは使用しない方が得策かと思います」

とりあえず、新型装備の開発は急務だな。バランスのバリエーションもほしいところだし・・・博士にお願いするか

部屋を出ようとしたとき

1機のISが目にとまつた。

「実習機にしては変だな、ずっとおいてあるわけないし」

「打鉄式式、日本の第2世代ISです。開発元は倉持技研ですが・・・

・白式の開発のために開発が凍結されていたと聞きますが」

バックスがデータベースにアクセスして情報を引っ張つてきた。

「ちょっと弄るつ、こんな素人みたいな機体じゃあ空中でバラバラになる」

打鉄式式にアクセス。

「了解です、同じISとしてもこれは改良していただきたいと思つていました」

バックスが計算する最適化データと現状データを組み合わせ不良セ

クタ を調整する。

「とりあえずはまともに動くよつこなはしたぞと・・・、でもやつぱり第2世代の壁を越えるには・・・」

「第3世代では面白くありません。いつそのこと第4世代クラスの物を組み込んではどうですか?」

俺はその提案を了承。第4世代技術であるハイパー・マルチロックオン機構（ロックオンできる基数は無限）、展開装甲などを組み込んでいく。

さうにアンロックユニットにエネルギー翼を追加、そしてブラックバードやミラージュと戦術リンクできるフェニックス・デジタル・システムに対応させた。

「まだやりたいことはいっぱいあるが、まあこれだけ直せば待機状態にも戻せるだろ?」「

「あの・・・・・」

実は半分ほど午後の授業に出でていない。

「なんか声が聞こえたような

「私の機体にさわらないで!」

私の?じゃあこの機体の調整は彼女が行つてたわけ?

「・・・死にたいのか?」

このままでは誤作動を起こしてしまいかもしれない回路、そんな回路を造る羽目になつた訳を聞かずにはいられなかつた。

「え?」

「何であそこまで極端なセッティングができる? IIS の寿命を縮めて、最悪お前も死ぬぞ」

自分の調整のどこが悪かったか分からないよつのでわかりやすい図を用いて説明する。

数十分後

「つまりこここのバイパス関係が偏つて流れていちゃんだエネルギーが回ってなかつたわけだ、これじゃあ待機状態にも戻せないやつとの思いで操縦者を説き伏せて説明を聞いてもらつているとき・ドアがあけはなたれて

「本校舎1階総合受付つてビニにあるのよーーーー！」

といらいらした声と共に嵐が来た。

「そ・・・総合受付？」

ACT・16へ続く

作者「予想外に速い登場でしたね打鉄式式は」

一夏「翔つて整備というか開発関係もできたんだな」

作者「アレだよ、あのウサギさんのラボにいるんだよ。整備や開発  
ができないでじつするの?」

一夏「なるほど」

作者「今回から他の小説と同じように後書きで雑談する」とこしました

一夏「何で俺なんだ?」

作者「君なら余計な」と言わないタイプでしょ? シツ ハリとかツツ  
ハリとか

一夏「なるほど。それで日本に余計なことは喋らないでくださいって書いてあるのか」

作者「あ、調整室にいる翔が怒ってる」

一夏「さてさて、といひでですね。基本的にアニメ版と小説版が混ざってるんですか?」

作者「一応は原作基準なんだけど面倒な部分はスルー」

一夏「だつて福音の件とかシャルルとのイベントとかは?」

作者「大丈夫。君にはシャルルとのイベントは来ないけど別のイベントが追加されるから」

一夏「死なない程度でお願いしますよセンセイ」

作者「だつてこの作品はユーフの世界なんだからね」

一夏「さてとそろそろお別れのお時間になってしまいました」

作者「次回は「転校生は専用機持ち」の3をお送りいたします」

ご意見・ご感想ご感想をお待ちしています

「とりあえず、あなたの端末にこの学園の地図と本校舎にある総合受付ルート入れましたんでこれで何とかたどり着いてください」

そう言つてその少女にスマートフォンを手渡すと

「ありがと、ところで貴方たち1年よね?」

切り返しの速い質問、切り替え早いね

「ええ、そうですけど」

「織斑一夏つて何組か分かる?」

一夏? 一夏の知り合いか・・・それとも

「一夏なら俺と同じ1組だよ。ちょいどクラス代表になつたけど」

そう言つと彼女はいろいろ事案を巡らせたようだ  
そして突然

「じゃあ、ありがと」

そう言つとこいつてしまつた。

残されたのは俺と打鉄式式の操縦者さん」と更識 簪さんだけになつた。

「明日は放課後に調整に来る予定だけど、嫌ならこれつきりで終わつてもいい。だけど俺としてはもう少しこいつを調整したい」

嫌だと言われ手も文句は言えないけどね

「・・・簪」

簪さんはボソッと言つた

「え?」

聞こえなかつたので聞き返すと

「私の名前は簪」

そう言えれば自己紹介してなかつた。

「自己紹介まだでしたね、俺は赤城＝ポルシェ・翔、時々間違われるけど俺は一応イギリス人と日本人のハーフだ」  
そうして俺は整備室を出た・・・のだが

「赤城、私の授業をサボるとは良い度胸だな」「えーっと陸孫？いや孔明か？いや織斑先生だった

「あ・・・すいません。そこでパンをくわえた女の子とぶつかりまして」

という80年代チックな言い訳をしてみるが・・・

「そんな言い訳が通用すると思つか？馬鹿者」

ダメでした

その後、反省文を書いて・・・何とか生徒指導室から生還。  
はあ・・・さて帰るか・・・

p.i.p.i.d

「電話？」

「やつほーみんなのぷりていーアイドルの束さんだよー！..」

「あー、今日の機動試験の件ですか？」

「それもそなんだけど久々にね・・・（ちょっと束博士！？）の縄といてくださいよー、でもこの食い込む縄が・・・」「（）」電話の後ろから聞こえてくるのは圭ちゃんの悲鳴？いや嬉しくて・・・変なことは考えないことにしよう

「はあ、と言つことは会えるんですか？」

「うん、とりあえず午後10時30分にバー・クレッションドで」

「了解です」

あ…ありのまま 今 起こつた事を話すぜ！

俺は織斑先生の生徒指導室から生還を果たし、部屋に戻ってきたと

思つたらシャルルに連れられて食堂に来ていたんだ  
な… 何を言つていいのか わからぬーと思うが  
おれも 何をされたのか わからなかつた…  
頭がどうにかなりそうだつた： 催眠術だと超スピードだと  
そんなチャチなもんじゃあ 断じてねえ  
もつと恐ろしいものの片鱗を 味わつたぜ…

そう俺は気がついたら織斑一夏クラス代表就任パーティーに來っていたのである。

それにしても女の子達はこういうイベント好きだよね  
それは男装してもシャルルは女子だしこういうイベント楽しそう  
にクラスメイトと話してゐるしね。

そして一夏は絶賛修羅場状態、『愁傷様。南無三・・・唐変木・オ  
ブ・唐変木ズ。

「はいはーい、新聞部です。噂の新入生、織斑一夏君、シャルル・  
デュノア君、赤城＝ポルシェ・翔君3人の取材に來ました」  
修羅場に來たのは新聞部、流石新聞部がないカメラだ。

「あ、私は薰 薫子。よろしくね。新聞部副部長やつてまーす。は  
いこれ名刺ね」

とりあえず新聞部の副部長の声だけしか聞こえないな。  
「ところで織斑・・・そつぞ・・・」

さて、俺はちゃんと時間までにバーに着けるのだろうか？

ACT・17に続く

## ACT・16 「転校生は専用機持つ」 3（後書き）

作者「さてと、おバカな〇〇のせいでなんと今日書いた分が全部ぶつ飛びました」

翔「なので時間がないので後書き雑談は」「めんない進行で終了です」

作者「もー、ブログの更新とかしたかったけど無理だった・・・」

作者「とにかく次回はもっと早めに上げる予定です」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6009v/>

---

IS インフィニット・ストラatos ~ツインドライブの使い手～  
2011年11月21日12時11分発行